ふぉっくすている

玉藻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ふぉっくすている

【Ｎコード】
Ｎ０７６２Ｗ

【作者名】
玉藻

【あらすじ】
記憶がないままレストランで働く狐娘の日常。
そこにやってくる自分と同じ姿の狐娘。
のんびりと冒険の旅に出たり日常したりと、ゆったりと話が進んでいく予定です。

狐尻尾はふかふかだよ（前書き）

前々から温めていたストーリーをようやく文章にしました。
初投稿の為、手探りながらやっております。

狐尻尾はふかふかだよ

「コンちゃん～15番テーブル料理あがったよ～。」
「は～い！！」

ランチタイム。宿屋1階の大熊亭は書き入れ時。
ご飯屋さんが村に一つしかないという訳でもないんだけど、元宮廷料理人だったという噂がある親父さんの腕がいいから、みんなついついやって来てしまうのだ。
まぁ暇だったら私もクビになっちゃうから困るんだけど。

「はいお待たせしました！日替わりのこだわりチキンソテー定食です。」
「待ってました！いや～コンちゃんやっぱここの飯はサイコーだね！」
「ありがとうございます！」
「しかもこんな可愛い娘に持ってきてもらえるとなおの事おいしく感じるよ！」
「も～褒めても何も出ませんよ～。冷めないうちにお召し上がり下さいね。」
お店が混み合う前に汲んでおいた井戸水をコップに注ぎその場を離れる。
すぐに戻らないと次が来るのだ。
「コンちゃん～今度は2番テーブル！」
「はいは～い！すぐ行きます～！」
ほらね。

髪の毛が料理に入らない様に巻いた三角巾の間からにょっこりと覗

いている狐耳にはちょっとうるさい位の喧騒。だけど、お客さんと軽口叩きながら、親父さんとおかみさんと連携取って忙しい時間を切り盛りしていくウェイトレスのお仕事は結構好きなんだよね。

・・・・・・・・・・・

「ふぅ…。今日も忙しかった～。」

賄いを食べてちょっと休憩し、洗い物や後片付けをして…気付けばもう夕方。

お店の営業は昼だけ。夜は一応村には一軒位ないとねって開けてある宿屋業務（けどほとんどお客さんが来ない）をのんびりやっている。私はお昼だけ働いてる。

夕飯も食べたいぞってお客さんも多かったんだけど、おかみさんが一時期身体を壊してしまっていたのと、翌日の仕込みをしっかりとりたいっていう親父さんのこだわりでやらないことにしたらしい。私ものんびり出来るし、この位のペースが親父さん達にもちょうどいいんだと思う。

私がここリーフタウンの宿屋兼お食事処「大熊亭」で働く…いや御厄介になったのは大体一ヶ月前の事…。

親父さんが近くの森に食材を調達に行こうとした時、森の入口付近の切り株の上で丸くなっていたのが私らしい…。

私としては気がついたら、宿屋のベッドの上で親父さんに見下ろされてたという衝撃的な出会いからしか記憶がないのだ。

熊とのハーフじゃないのかと疑いたくなるような髭モジャでがっしりした大柄な親父さんは、昔冒険者だった事もあるらしく、眼光鋭く威圧感半端ない。目覚めた瞬間に悲鳴を上げかけて、その目力ですぐさま無言で震えてしまった。

見た目と違ってものすご～く優しくて、おかみさんと二人で私をま

るで自分の娘の様に扱ってくれる。
色々訊ねてみて記憶がないと分かると、思い出すまでここにいていいと言ってくれた。何もしないで置いてもらうのもなんだし…とお店の配膳のお手伝いを始めたら、元々素質があったのかすぐに覚えて働けるようになり気付けばお店もさらに繁盛、お給料まで頂ける事になった。

私も記憶が無いのは不安だけど、なんにも思い出せないもんだから今は今の生活を楽しんでいる。おかみさんと三人で毎日忙しく働いている内に気付けば一ヶ月…っていう感じだ。

狐尻尾はふかふかだよ（後書き）

感想等もしあれば非常にありがたいです。

そこは憩いの場所（前書き）

体調崩して遅くなりました。二話です。

そこは憩いの場所

太陽が沈み始め外も段々橙色から紺色にそして墨の色に変っていった。
さて今夜も出掛けるかな。

うちの宿屋は比較的村の賑やかな所にあるんだけど、そこに比べると山を後ろにして静かなそこは、村の中でも少し毛色が違う場所。宿屋から少し歩き、村の表通りを抜けると綺麗に手入れされた庭がある。その庭の先の入口の扉の横には左右からドラゴンの彫刻がお出迎えしてくれる。片方は口を開いていて、片方は閉じている。悪いものが来たら食べてしまう様に、そして逃がさないようにという守り神らしい。
このドラゴンの彫刻を私はなんだか気に入っていて、必ず撫でてから入る事にしている。

カラーンコロ～ン♪

「マスターこんばんは～。」
「いらっしゃい。」
渋いバリトンの声でマスターが声をかけてくれる。黒色の髪、黒い服に素敵な髭の渋めのおじ様だ。
ここは「烏龍亭」私が気にいっているお店。私の定位置のカウンター席の端っこに座る。
お店自体はあまり大きくはなく、２０人入ろうとしたら溢れる位。こじんまりとしながらも、お洒落なインテリアが色々配置されている素敵なお店だ。
壁際にはフルートやバイオリンと呼ばれるらしい楽器が飾ってあり、そこから静かに音楽が流れてきている。マスター曰く、妖精と契約

してるとか。

「御注文は？」
「いつもの♪」
「あいよ。」
ニヤッと笑いながら頼むと、マスターもニヤリと返してくれる。
いつものって言う常連さんの言い方に憧れて、二回目に来た時から私も無理矢理使ってる。

尻尾が床につかないように、少し高めの椅子に座ってるんだけど私だと足が床に届かない。
足をプラプラさせながらマスターが「いつもの」を用意してくれてる様子を見ているのは楽しい。子供ぽいと笑われる事もあるけどついやってしまう。自分が幾つなのかは覚えてはいないけど、知識量やなんかで子供ではない…とは思う…多分。

逆に黒髪をオールバックにしていて、銀色の前髪が何本か垂れてるマスターは渋くて大人って感じだ。年齢は内緒らしい。こういうお店のマスターはこういうものだというこだわりがあるんだとか。
いつかあの前髪に触ってみたいと思うけど、それこそ子供扱いされそうで口には出さない。

毎日の暮らしやお店が忙しくて基本的に忘れてるけど、自分がどこから来たか、何をしていたのか、そもそも誰なのかわからないっていうのは結構面倒だ。

宿屋で働きだした時もお客さんに色々聞かれても何にも答えられず…親父さんに随分助けてもらった。最近じゃ常連さんの顔も覚えて軽口を返す位に慣れてきてはいる。

そうこう考えている私の前でマスターは豆を計り始めた。お客さん毎に豆を入れ直すし、分量も違うらしい。
昼間の内に焙煎した豆を天秤で図る。小さい竜の形をした分銅が何かの単位らしく、目の前で竜が二つ三つと揺れながら天秤の片側に置かれていく。もう片方に置かれた紙の上に粉が少しずつ置かれ、揺れが止まると、素早く濾紙へと移される。そして静かにお湯を注ぐ。
この瞬間・時間が私は好きだ。

「はいお待たせ。いつもの。」
「ありがとうございます。」
ニマニマしながらカップを受け取る私をマスターもまた素敵な笑顔で見つめている。
持ち手も竜の彫刻になっているカップの中で上品な香りを漂わせている黒い液体は「珈琲」だ。
「いただきま～す。」

一口飲むと身体が温まってきて……を通り越して熱くなってくる。
そして身体がぐんにゃりしてくる。
むふふふーん♪
そう…何故か私は珈琲で酔っ払うのだ。
「相変わらず面白いなコンスケちゃんは」
「なにがですかぁ～？」
「見てて飽きない。」
「よくーいわれますぅー。」
カップ半分位飲む頃にはもう結構へにゃへにゃだ。
なんだかんだで、記憶がないというのはストレスになっているらしく、普段は無意識に張り詰めているものがここでは緩む。
初めてここに来た時もそうだった。目が覚めて親父さんに色々聞か

れて何も覚えていない…というよりも、まるで何かが抜け落ちた様な空白でパニックになりかけた時、親父さんは黙ってここに連れてきてくれた。

まぁ親父さんも私が珈琲で酔っ払うなんて思わなかったらしく、ぐんにゃりと溶けてる私を見て随分驚いていたけど。マスターは何も言わず、溶けてなんだかよくわからなくなっている私をただ優しい目で見ていてくれた。それから仕事終わりに時々来る様になり、今に至る…。

そして私は今日もマスターにくだを巻くのだ

「ますたぁぁ～きいてくださぃよぉぉお…。」

「全くコンスケちゃんの尻尾に触ろうとするなんてヤツは殴っていいんだよ。全くこの極上の銀色フサフサ尻尾を。」

「ますたぁ、さわってみますかぁぁ。」

「ほらほら、そういうのは大事なヤツの為に取っておきなさい」

「そういうもんなんですかぁ。」

マスターだけは、フルネームのコンスケで呼んでくれる。女の子なのに、なんでコンスケなのかはわからないけれど、私は自分の名前がコンスケだという事だけは知っていた。大体はみんなコンちゃんと可愛らしく呼んでくれる。

マスターも誉めてくれる私の尻尾はお尻から、頭の後ろ位まで、「のの字」に少しカーブを描きながら伸びている。綺麗な銀色で、櫛通りもよくて私も気に入っている。寝るときは抱きしめて寝れるから最高だ。

絡みながら意識が段々と怪しくなる私の話に相槌をうちながら、マスターは珈琲にミルクを垂らしてくれた。黒い珈琲の上をミルクが

綺麗に渦を巻いていく。見てると綺麗だけど目がまわってきて、目をギュッとつむる…。マスターの声だけなんだか遠くから聞こえて来る…。

「銀河系みたいだろ。」

「？」

「世界の境界もこんな風に溶け切らないで曖昧だからお前達みたいなのが来れるんだよ。なぁユウスケ。」

（わたしはコンスケだよマスター…）

そうして意識が飛んで行く私は心の中でマスターの謎の質問に答えながら眠っていった…。

そこは憩いの場所（後書き）

コンちゃん並に頭グラグラしながら書いたから何かおかしいかも…

（ー ー）アフン

身体が資本のお仕事です。（前書き）

ようやく投稿出来ました。ちょっとこの辺りから毛色が変わります。

身体が資本のお仕事です。

「ユウスケ早く起きて支度しな！」
「…わかってるからデカイ声出さないでくれよ姉ちゃん…。」
今日も姉ちゃんに叩き起こされ、俺は夢から強制的に覚醒させられる。

「ふぁ～あ。…今日はなんだっけ…？」
「あんたがこの前やったモーションのやつ。あれの最終調整でしょ？遅れたら許さないわよ！もう入り時間迫って来てるんだから早く行きなさい！」
「んー。」

割と身長が高めの俺をさらに超える姉ちゃんは、声も態度に身長に…と全部でかい。あ…胸もデカイな。
モデル並の顔してんだから、黙ってりゃいいのにって言ったら、黙ったら窒息しちゃうでしょと平気で返してくるぐらいだ。手が口の先に…ではなく、手と口が同時に出るから注意も必要だ。
多分本来の意味の戦う大和撫子を地でやれんだろうな…。この前の舞台でも振袖着て戦ってたし…。

うちは【ブルー】という何の捻りもない名前のアクション事務所だ。
といっても元自衛官の親父が立ち上げて、俺と姉ちゃんとが所属しているだけの小さな事務所だ。
ヒーローショーをやったり着ぐるみを着て野球場でバク転したり、舞台でのアクション部分を担当したりと色々な仕事がある。最近はゲームのキャラクターの動きを撮影…いわゆるモーションキャプチャーの仕事なんてのも増えてきた。寝起きに姉ちゃんから言われた「モーション」というのもコレの事だ。

さっさか着替えて昨夜のうちに用意しておいたリュックを担ぎ、玄関に傘と一緒に置いてある愛用の木刀を持つ。用意完了。
「じゃあ、行ってくるー。」
「はいよ、飯はちゃんと喰ってから現場入りすんのよー。」

今日は時間ないから食わないで出て来てしまったけれど、身体を使うのがメインの仕事だから、食事は本当に大事だ。朝飯でもちゃんとご飯を二杯はおかわりする。何があってもいいように飯は食っとけというのが親父の口癖だ。

【株式会社神無月】
誰もが名前位は聞いた事のある大手ゲーム会社だ。格闘ゲームから、流行りのハンティングアクション、さらにはＲＰＧまでと手広く作っている。都心の一等地に本社を置き、支社も幾つかある。この会社は早い段階で、ゲームにモーション技術を取り入れて滑らかな動きのゲームを作った事でも有名である。

いまだ学生である俺も幾つか参加していて、うちの家計は大助かり。自分が参加したゲームは発売後にもらえるから家で暇な時は、自分の動きのチェックを兼ねて遊んでいたりもする。

ビルの入口入ってすぐの受付で受付嬢さんに声をかける。
「すいません、社長と約束していたブルーのユウスケですが。」
「はい、伺っております。少々お待ち下さい。」
椅子に腰かけるまでもなく、社長がエレベーターから降りてきた。

「待たせたね。行こうか。」
「はい。」
最上階まで直通の高層エレベーターの無重力感を味わっていると、素敵バリトンの社長の声が狭いエレベーターの中で響いてきた。
「実はね…、ユウスケ君にやってもらいたい最終調整というのは…、実際にゲームプレイの部分なんだ。」
「え！この前のあれはもう完成してるんですか？」
「一応一通りデバッグは済んで、動作も最適化は進んでるだけどね…。ただ…」
「ただ…？」
「実際に動かそうとすると、何か引っ掛かるんだよな。テスターが出払ってるし、実際にユーザー目線でもゲーム出来る人が欲しくてね。」
「で、俺ですか。」
「そういうこと。」
社長はプログラマーから会社を興した人だ。ここぞという部分の勘所も鋭く、ツボを押さえた丁寧なゲーム作りは定評がある。俺も直感で生きてる気がするけど、社長のは天啓みたいな感じだ。おかげで今まで出したゲームも常に高い評価を得ている。
「まぁ今回の作品ばかりはバグなんてあったら洒落になんないですからね…。」
「そんなんだよ、だからユウスケ君を呼んだんだ。」
「でも、俺プログラムなんてまるっきりわかりませんよ。」
「大丈夫だよ、頭よりも身体使ってもらうから。」
「？？」
そうこうする内に到着したエレベーターは俺と社長を吐き出すと地

上に帰って行った。

身体が資本のお仕事です。（後書き）

【モーションキャプチャー技術】

昔は全身に色々貼付けて動きを取り込んでいましたが、最新式は壁にカメラが埋め込まれていて、体育館みたいな所で動くだけでいいそうです。一度撮影すれば、ある程度流用出来るけど作品毎に結構取り直したりしたりするそうです。

こんにちわ赤ちゃん私がママよ？（前書き）

湿気で頭が痛いです…。台風イヤーです。

こんにちわ赤ちゃん私がママよ？

コンピューターが並ぶ無機質な部屋。
１０人位は入れるだろう部屋は今は無人だ。
社長はそこを素通りして奥のロッカールームらしき部屋に俺を案内する。

「とりあえずこれに着替えて。」
「全身タイツ…って、まだ何か動きのキャプチャーありました？」
「まぁね。」
着替え終わるとさらに奥へ。
今度は幾つかの小部屋が連なっている。インターネットカフェみたいだ。小さな部屋にカプセルが一つずつ設置してある。多分このカプセルの為の部屋なんだろうけど、これって…。

「ベッカムカプセルですか？」
「そうそう、やっぱりユウスケ君は知ってたか。」
「使わせて貰えるのはありがたいけど、ゲームには関係ないですよね…？」
「まぁいいから入ってごらん。」
「はぁ…？」

半信半疑ながらも、最近疲れてたからなぁとカプセルに滑りこむ。
何度か使った事あるけど、よく眠れるんだよな…。

「じゃあ行くよ…。楽しんできてね…。」
いつの間にか部屋から出ていたらしい社長の声が、カプセルの内部スピーカーから聞こえてくる。
「え…？楽しむって…。」

酸素が漏れないように気圧が変化し始めるプシューという音が聞こえ、同時にゆっくりと視界が明滅する。あまりの眩しさに目を閉じた所で……

……

……暖かい……ん？

森の中？

まぶたを開けるといきなり視界一面緑が広がっている。

随分としっかりした木々だ。

都会の公園に生えてる様なレベルじゃなく、山の中に生えている様に大地から根強く伸びている。

そして何故か俺は切り株の上に寝ていたらしい。

俺が丸まって寝れる位だから、この木も元々は随分と立派な木だったんだろうなぁ…って、今更ながらここはどこなんだ？

「社長～！！何なんですかここは～？」

周りに人の気配もないけれど、とりあえず声を張り上げてみる。何だかいつもより声が高いな。しかも視界が低い気がする。

Ｐｉ！！

いきなり電子音と共に顔の目の前に半透明な板の様なものが現れた。

「うひょあ～！」

なんか随分と可愛い（？）悲鳴を上げてしまった。

『アローアロー。ユウスケ君聞こえているかい？』

「聞こえてる…というか文字が見えてますよ。これ…チャットウィンドウですか？」
『そうそう飲み込みが早くて助かるよ。』
「これ…今、俺がいるのはゲームの中とか言いませんよね…。」
『またまた正解。もう説明必要ないね。これが開発中の新作ゲームだよ。』
「ゲームって…臨場感ありすぎですよ！というよりも本物にしか見えないですよ！」
『今の君にとっては本物だよ。』
「え？」
『こちらの…酸素マシーンの中で寝ている君の精神・考え方のパターンや思考経路等をコンピューターで取り込んで、そちらで再現させているんだよ。そこに今いる君は現実と全く同じ様に見たり聞いたり感じることが出来る。』
「じゃあ酸素マシーンの中の俺が今起きたら、ここの事は何も覚えていないんじゃないですか？だって俺自身からすると、寝て起きただけですよね？」
『セーブ機能を使えば大丈夫。終了時にそちらで経験したことを、こちらの記憶とくっつけるから、ちゃんと記憶として反映させることが出来る。』
「なんかスゴイですね…。」
『なんだけど開発中だからね…。多分大丈夫だよ。』
「…恐ろしいですね…。」
『とりあえずステータス画面開くから色々確認してね。』

Ｐｉ！！

またさっきの電子音と共にどうやら俺らしき人物の全身が表示される。
「…って社長！これコンスケじゃないですか～～！？」

俺の叫び声が再び静かな森に広がった。

こんにちわ赤ちゃん私がママよ？（後書き）

ベッカムカプセル＝酸素カプセルです。
酸素吸うだけの機械もありますが、カプセルだと、気圧を変えて外に高濃度酸素が漏れない様にして、しっかりと全身を酸素で満たしてくれるので非常に疲れが取れます。今欲しい・・・・・。

しっぽっぽー（前書き）

絶賛台風の影響の豪雨中です。音楽かけても何もきこえましぇん。

しっぽっぽー

『そうだよ、慣れてるだろう？』
「いや…慣れてはいますけど、女の子ですか…。」

コンスケとは、以前俺がモーションをやり、実際にとあるゲームで使用されたキャラクターだ。
頭の上に突き出した三角の金色ががった色の狐耳、同じ色の髪の毛。「のの字」を描いた狐のもふもふ尻尾も金色。背は小柄で可愛らしい感じの女の子だ。俺の姉ちゃんの凶暴さとか存在を全て裏返したら出来る感じ…。

女形もやった事はあったけれど、可愛らしい感じの女の子の動きをお願いされて相当苦労した覚えがある。その分かなり愛着あるキャラクターだ。デザインを決める時も色々好みを反映させてもらっている。

まさか自分がそのものになるとは思わなかったけど…。ちなみに女の子なのに、コンスケという名前は、ユウスケに狐の鳴き声でコンスケらしい。安直だ社長…。

アクション関係の仕事をしていると、モデルさんと一緒に仕事をする機会も多いけど、色々こっちが気を配らないといけないから正直あんまり異性として恋愛感情はもてない。一度中身も凄く素敵で惚れ込んだ人もいたけど、酒癖悪くて背中に寝ゲロされさすがに冷めたもんだ。

で、あんまり身近にいない妹系キャラがいい！って社長に頼みこん

で、こういう感じにしてもらったのだ。だって俺の周り背が高くてカッコいい系の女の子しかいないんだもん…。筆頭は姉ちゃん。ちなみに学校はあんまり最近行ってないからクラスメイトの顔すら覚えてない。

『ユウスケ君が演じた動きの中で、一番世界観にあってたし、何より可愛らしいからね。』

「そうですね。最近モンスターとかも多かったですしね。」

『さてさてノッテきた所でいい加減本題に入ろうか。ユウスケ君に試してもらいたいのは、地獄の門までのルートの確認と、正常に動いているかの確認なんだ。併せて通常動作をちょこちょこ試す…これはまぁ移動してたら大丈夫かな。』

「やることは何でもいいですけど前もって教えて下さいよ。さすがにビビりますよ。起きたら狐っ娘とか。」

『表情も反映するからさ、ビックリしたコンスケの顔も見たくてね。』

「それもテストですか……？」

『半分は趣味だよ。』

「さいですか…。」

『それに精神の取り込みのラグなんかも見たかったからね。予備知識がない人間でもラグはなしと…。』

自分がコンスケになってるなら口調も変えた方がいいかもしれないが、面倒なのでそのままだ。すまぬコンスケよ。

「地獄の門ってなんか凄そうなもの入れましたね。」

『あぁ、あれだよロダンの地獄の門。』

「…急に芸術的ですね。」

『世界に七つしかない未完成の芸術だよ！あれを上野で見た時にビ

ビッと来てね。モチーフとして使わないわけにはいかんと。』
「確か上野のは野外だから汚れてましたよね。」
『静岡もその後に見に行ったんだよ。』
「すごい熱意ですね。とにかく、とりあえずどっちに向かえばいいんですか？」
『そこから見える範囲で、針みたいに尖った山はあるかい？』
「ええと…、あっちに。はい、見えます。」
『そこの山の頂上付近に洞窟があるからその中を目指してほしい。もしあまりに時間がかかりそうなら助けを出すよ。』
「はーい。」

とりあえず、尻尾が付いているからな。歩くのに邪魔でないといいけど。お、結構バランス取れるな。
服は動きやすいようにショートパンツに、足元はしっかりしたスニーカーみたいな靴だ。よかった…これも実用性よりも趣味を優先されたら動きづらいところだった。
とりあえずテクテクと歩きだす。視界がいつもより低いし歩幅も狭いけど、普段の自分から感覚を修正してく。歩くたびに尻尾が少し左右にフリフリ動くのはなんかいいな。後ろから見たら絶対ニヤけると思う。
「そういえば社長はどういう感じでそっちから見えてるんですか？」
『あぁ、このチャットウィンドウがそのまんまディスプレイになってるよ。だから前を塞がないでね。文字が出てる方が前だから。』
「あーい。」

なんかやり取りはいつも通りなんだけど違う人間の違う身体で見ている世界は新鮮だ。
いる世界も違うからなおさらだけど。
落葉樹でないのか、あまり葉っぱは落ちてない。普段なら多少の段

差でも何でもないけどコンスケの身体だと丁寧に越えてかないと駄目だな…。

しっぽっぽー（後書き）

モデルさんとアクションチームは結構絡む事が多いそうです。寝ゲロの件は知り合いの実話を元にしています。合掌…

きちゅね現る（前書き）

うぅぅ中々話が進みませぬ・・・。後何話かで一区切りになるかな？

きちゅね現る

「うぅむ〜〜〜。」
大分歩いてはみたもののやっぱり女の子の足では速度が出ない。
うっそうとした森というわけでもないけれど、都会に慣れた自分には中々歩きにくい上に感覚を調整しながらだから神経を使う。
獣もあまりいないのか、通り易い部分もないし。気を抜くと迷子になれそうだ。
とかため息つきつつ考えていると尖った枝で指先をちょっと怪我してしまった。うわぁ…ちゃんと血が出るし痛いわ。リアルだなぁ。
仕方ない困った時の神頼み。

「社長〜〜。」
『はいはい』
「もう見飽きたでしょ〜？そろそろなんか乗り物とか出しませんか？」
『もうギブかい？まぁ通常動作の範囲はもうよさそうだし、助っ人だすか。』
「助っ人？」
『さっき怪我したでしょ？その血をちょっとひらけた地面に垂らしてごらん。』
「えっと・・・」
振り返ると程よくひらけた場所があった。
ちょっと痛いけど…。指をギュっと。

ポタリ

「垂らしましたよー。」
『うん、OK。ちょっと待ってね……はい！』

ぼう～～んとなんだかマヌケな音がして、煙と共に何かが現れた。
社長のこだわりがよくわからなくなってきたなぁ…。
煙が晴れると現れたのは、

「おぉ！！九尾のきちゅね！」
コンスケの守護用の霊獣九尾の狐だ。名前がきちゅねなのは…まぁ以下略。
真っ白い毛皮につぶらな瞳。もさもさ尻尾はちゃんと九本生えている。
「これは…もふるしかあるまい！！」
少しびびるきちゅねを無理矢理なで繰りまわす。
「ふかふかだぁぁぁ…うへへへへ…へへへへ…」
「く～～んきゅーーん…コ・・・コン・・・」
『おお～～い、ユウスケ君ほどほどにしないと嫌われるかもよ。』
「はいすいませんやめます。ごめんねきちゅね。」

きゅーーんという鳴き声と共にちょっと潤んだ瞳で下から見上げてくるきちゅねは破壊力あり過ぎる可愛さだ。ぐっと自分を抑えて、きちゅねに問いかける。
「で、どっちに行けばいいのきちゅね？」
きちゅねは首をしゃくって、背中を指し示す。乗れってことか？乗っていいのか？
「社長乗っても大丈夫なんですか？」
『今のユウスケ君の体重なら大丈夫だよ。本気出せば二人はいけると思うし。』

四つの足を折り曲げて、身を屈めてくれたきちゅねの背中によじのぼる。普段の自分ならひょいってサイズなのになぁ。俺が乗ったのを確認し、きちゅねがゆっくりと身体を持ちあげる。優しいなぁイ

イコイイコしてあげよう。
『ちゃんと掴ってなよ。速度は結構でるはずだから。』
「本当ですか？」
『うん、馬くらい出るから。』
「え？」

俺が思わずぎゅっと毛皮を掴んだとたんにきちゅねは走り出した。
「おわぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～～～～」
早い！これで馬位なのか！？
自分の身体の差なのか、すごい体感速度ですわよ！
思わず身体全体でしがみつきつつ目を閉じてしまうけど、耳元（頭の上の方）がびゅうびゅう言っている。
ゆっくりと目を開けると…スゴイ！
地面に足が付いているのが不思議なほどに軽やかにきちゅねは走っていく。疾走と言っていいと思う。障害物も軽々飛び越えていくのに、足の裏でしっかりと衝撃を消しているのか身体に負担はない。
「よしこのまま一気に山までＧＯ！きちゅね～～！」
あ…チャットウィンドゥ見えないや。まぁいいや。

きちゅね現る（後書き）

きちゅねは完全に私の趣味です。すいません。

この門をくぐりしものは一切の希望を・・・（前書き）

どうしてもここまでは書きたくて夜更かしです。

この門をくぐりしものは一切の希望を・・・

あんなに遠くに見えていたと思っていた山の麓までも、きちゅねの速度ではあっという間だった。
早い、安全、快適と最高だ～。

「よーしきちゅね一旦ストップ！社長～？」

Ｐｉ！！

『はいはい。』
「この山ですよね、結構登ります？」
『これだよ。頂上付近に設置したはずだからそこそこあると思うよ。』
「了解です。きちゅねもうちょいお願いね。」
さわさわと頭をなでてやると、目を細めて嬉しそうに応じた後、山道を登り始めた。
本当は自分で登ってもいいんだけど、山頂近くは岩だらけに見えるし、きちゅねの乗り心地は快適だからついつい甘えてしまう。

しかし、開発中だからってここまで虫も動物も一切いない世界ってなんだか不気味だな。
自分が今乗っているきちゅねはふかふかして温かく、すごく安心する。でも周りは、風の音なんかは聞こえるけど生き物の気配がなく殺伐として感じる。この山の雰囲気のせいかな。
岩だらけで灰色一色の山。麓からの緑の切り替えも極端だ。

「これかな？」
山頂付近までも快速きちゅねで楽々だった。

『あぁこれだよ。この中を確認して欲しいんだ。何故かこの中がプログラム上でちゃんと確認することが出来なくてね。ずっと進行止まってたんだ。自分で見に行ってもよかったんだけど、客観的に見て修正したかったし動きの修正や痛みのフィードバックとか修正もやっちゃいたかったからね。ユウスケ君待ちだったのさ。』
「バグですかね？リアルに巨大な虫とかいたら嫌ですよ…？まぁ行ってきます。」

ここからはさすがに歩くか。
「きちゅねお疲れ様。」
ひょいと華麗に降りたいところだけど、片足ずつよいしょーと不格好になりそうになった所できちゅねが身体を下げてくれた。いいこいいこ。
さて、きちゅねを横に従えていざ洞窟へ。なんかいかにもダンジョン的な感じだ。
「中は随分暗いなぁ。明りなんて持ってないぞ。」
そうつぶやくと、きちゅねが身震いし始め、すぐに身体から3個ほどの火が浮かんで空中で静止した。狐火か。
紫色だからちょっとまだ暗いけど、光量としては十分だな。
「お前便利だなぁ。」
そのままきちゅねに横を歩いてもらい奥へ進む。

目が慣れてくる位の時間トコトコ歩いた頃に、随分と広い空間に出た。ちょっとした体育館並みの広さだ。
ここにあるのかな…？おぉ！あったあった。
結構な広さで狐火でも全体が見えるわけではないが、奥の壁側に巨大な門があった。

大人三人分程の高さに、横は整列したら大人でも4～5人は並べる程の幅。
漆黒の光る材質で出来ていて見上げるとかなりの迫力だ。
現実ではロダンが製作し、世界に七つ存在している地獄の門。ダンテの神曲からインスピレーションを得たというこの門は、有名な「考える人」の像を含め、多数の像が鋳造されくっついている。
「社長着きましたよ～。」

Pi！！

『おぉ着いたのか。見た感じで何か違和感はあるかな？』
「特に問題はなさそうですよ。上野で見たアレと特にデザインとか変えてないですよね？」
『そのはずなんだけど…なんか随分と黒光りしてるね。オリジナルと同じブロンズで設定してあったんだけど、パラメーター間違えたのかな？』
軽く触ってみると、金属というより石の感触だ。
「これ黒曜石とかじゃないですか？」
『おかしいな…今こちらでも確認したけど、確かにブロンズで設定してあるよ。他には何か気付いた所はある？』
「後は…あれ？竜の彫刻なんて付いてましたっけ？」
『そんなの付けないよ～。ファンタジーだけど、これは実際に見た感じを伝えたかったからカタログも見ながら細かく設定してあるし。』
「じゃあ、明らかにおかしいですね。」

そんな話をしていると、何やらゾクっと気配を感じる。
きちゅねは真横にいる。この世界に入ってから一切感じた事のない気配…殺気だ。

「社長…モンスターの設定ってしていませんよね…？」
『まだ何も配置してないよ。村人とかは村に配置してるけど、モンスターはまだこれからだったから。』
グルルルルル
この広い空間の中に明らかに何かいる！
「きちゅね！」
意図を察したきちゅねが振り返った俺が見ている方向に狐火を飛ばす。
そこにいたのは…

「社長…ロダン…ダンテの後は黙示録からですか…？」
明確な殺意を持ってこちらを睨んでるのは発達した獅子の足、巨大な羽、頭が１０本のドラゴンだった…。確かヨハネの黙示録の海から現れたドラゴンの王じゃなかったけか。こんなのまで作ったのか。すごい迫力だわ。そしてこの地獄の門と同じサイズの巨大な生き物からは、きちゅね以上に生き物としての生々しさを感じる。
『こいつは完全におかしいぞ！ユウスケ君、ここはとにかく逃げてくれ。ラスボス用に作って寝かしておいたプログラムで攻撃パターンも設定していないから何も出来ないはず…通常は。武器は送れないし、まともに攻撃されたらマズイ。痛みの感覚はこれから調整予定だったんだ…。』
「つまり、攻撃されたら痛いなんてもんじゃすまないんですね…。」
『強制ログアウトを試してみる。が…さっきから割り込みが入って思うようにコマンドの受付がされない。とにかく時間まで逃げてくれ！』
「こんな鬼ごっこは燃えますねっ！」
悠長に話している間に素早く距離をつめてきたドラゴンは前足を振り上げて攻撃してきた。こいつ早い！
きちゅねに乗る暇もない。後ろはすぐ門。横に逃げるしかない！
「がはっ！！」

前足をどうにか左に横転してよけた俺に追撃で頭が噛みついてくる。
１０本中８本が前後左右から攻撃してくるのを避け切れず、右腕と尻尾をやられた。残り２本の頭はきちゅねをけん制している。
これは…この世界でもし死んだら精神はショック死するんじゃないか…。
骨折なんかもしたことあるし、結構痛い目にあったことはあるが、この痛みは尋常じゃない…。
社長には大丈夫と言われているけど、イレギュラーは続いている。ここでもしも死ぬような目にあった場合、正直保障はない。
「保険は入ってるけど、仕事途中で死ぬのなんてのは勘弁だな。」
大体、この俺が死んだ場合、あっちの俺は記憶がここの分が入らないだけかもしれないが、今この場に存在しているこの俺は確実に消えるだろう。それは結局一つの死じゃないのか…。
ダランと感覚なくぶら下がっている右腕をおさえつつ、痛みでパニックになりかけながらも無理矢理避ける。尻尾も切られてせいでせっかく慣れたバランスを崩していて動きも怪しい。
どうにか距離をとったが、相手もさるもの。
俺らが入ってきた入口を背中にしてやがる…。どうにか隙を作らないと外に脱出も無理だ。
「きちゅね！」
俺の声に反応して合流しようとするきちゅねに、ドラゴンは炎を吐きかける。
きちゅねの速度でどうにか回避は出来ているものの、動ける場所が狭まってくる。
「社長！まだですか！？」
『お待たせ！後１分で強制ログアウトだ！なんとか逃げ切ってくれ！』
「らじゃ。帰ったら焼き肉たらふく食わせて下さいよ。」
『店貸し切って食べさせあげるよ。』
「ＯＫ、聞きましたよ。きちゅね狐火！！」

炎を避けながら、きちゅねが狐火をドラゴンに向かって飛ばす。そこに狙い定めて足元から素早く拾った石を投げつける。
ちょうど炎を吹きかけようとした一つの頭の口付近で狐火が拡散し、目くらましになった。今だ！
俺は無理矢理走ってきちゅねの方へ向かう。ドラゴンは混乱しているのかそこら中に炎をまき散らしながら暴れまわっている。どういう原理か、ドラゴンの炎は消えずに燃え続け障害物になっている。走る勢いのまま、きちゅねが拾ってくれることを見越してジャンプ！よし乗れた。
「きちゅね今のうちに逃げるよ。」
片手できちゅねの速度に耐えるのはきついが、しっかりつかまる。頭の中にカウントダウンが始まる。システムメッセージか。
≪後３０秒で強制ログアウトします。３０…２９…≫
暴れて開けてくれた広間の入口もまもなく、これは間に会ったな。
≪２５…２４…ニガサンゾニンゲンヨ…≫
「え！？」
その瞬間凄まじいい勢いで伸びたドラゴンの尻尾に吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。
「っぐぁ・・・・」
『ユウスケ君！！』
≪１３…１２…キボウヲ…１０…ステヨ…≫
あぁぁぁ…避けられない…爪が振り下ろされ…俺は…俺は・・・
≪２…１…ログアウト完了致しました。またのプレイをお待ちしております。≫

この門をくぐりしものは一切の希望を・・・（後書き）

ＢＡＤＥＮＤではないです。まだ続きます。
ロダンの地獄の門は静岡の県立博物館で常設展示（写真撮影ＯＫ）、上野の美術館では野外に置かれています。有名な「考える人」は元々地獄の門の一部品だったけれど、人気があったのでばらしても扱われているようです。

玉葱目に染みても…

「雨降りは嫌だなぁ…。」
玉葱の下処理という地味で目に沁みる作業を繰り返している私は涙ぐみながら外を見る。
農作業とか、狩りが基本の村の人達が常連さんなので、こうして雨が降ってしまうとお店は途端に閑古鳥。
まぁいつも忙しいからたまにはいいんだけどね。

「よしっと…終わり〜。」
さすがに一日分ずっと玉葱の仕込みとかきついね。皮剥いて刻んで…。
涙ぐみながら厨房の親父さんに声をかける。
「親父さん終わりましたよーぅ。」
「おぉコンちゃんお疲れ様。悪いねぇ。女の子泣かしちゃって。」
「いえいえ暇つぶして終わっちゃうのも勿体ないですし。」
「掃除も終わったし、この様子だとお客さんも来ないだろうから、上で休んでていいよ。忙しくなったら呼ぶから。」
「はーい。」

お言葉に甘えて休憩することにする。暇疲れと玉葱疲れで妙にだるい。
二階に上がろうとすると、入口のベルが鳴った。
「あ！いらっしゃいませ〜！」
「いいよコンちゃん。こんな雨の中いらっしゃいませ。」
「何か温かいものを頂けたら…と。」
「あいよ。濡れたマントはそこに架けといてくれ。煮込みシチューなんかでいいかい？お客さんんんん！！！！！」
「え？！親父さんどうしました？」

「コ…コンちゃん！？」
「えぇぇっ！？」
慌てて降りてきた私が見たのは、絶句して口をパクパクしている親父さんと……私と同じ顔だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

親父さんは何か感じたのか、料理を出したら店を閉めて2階にあがっていった。私は話しを聞く為にお客さんと同じテーブルに座らせてもらった。あちらも話したそうだったし。
「驚きました。」
「俺も驚いたよ。」
私とおんなじ顔をしたお客さんは、驚いた声も出さずにパクパクとご飯を食べている。

ほんとに鏡を見ているみたいにそっくりだこの人。
だけど、尻尾の色が私の銀色と違って金色だ。
「あ…水お代わりちょうだい。」
「あ…すいません気付かなくて…。はいどうぞ…。」
「ん…ありがとう。」
自分の声もこんな感じなのかな。落ち着いた雰囲気と話し方で私よりも凄く大人に感じる。
「さて…どこから話したもんかな。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あの時、ログアウトは間に合った。
ただし半分だけ。

目が覚めた俺に社長は平謝りしてくれた。まぁ正直、あちらの体験はこちらの身体にダメージはないから関係ないけれど、身体を真っ二つにされたなんて気持ちの良いもんじゃない。
念のため、病院にも行かされたが、当然何も異常はなかった。

…身体には。

遅くなってから帰宅した俺を見るなり、珍しく家にいた親父は開口一番こういった。
「お前気配が薄い。」
姉ちゃんも何か感づいたのか、「影が薄い」と失礼な事を言ってきた。
普段からそうだなとか納得してはいけない。
直感とかで本能的に生きている我が家だから、あながち冗談なんかではない。
そしてそれが実証されたのは一週間後の事だった。

「精神が半分ゲーム内に残ってる！？」
「うん…どうやらあの時に分かれてしまったらしい。」
「そんな事ありえるんですか！？」
「ありえる訳ないけど、そうとしか考えられないんだ。」
そんな簡単に信じられるわけがないが、あの場所での経験はゲームだから…というもので済ませられるレベルでなかったのも確かだ。
「今のままだと、精神のバランスを崩してユウスケ君は弱り、あちらのコンスケも弱り…最後は二人とも…。」

「…。」
「強制コマンドを色々試してみたんだけれど、ゲーム自体今こちらからのアクセスをほとんど受付なくなっているんだ。単純にウイルスやハッキングという問題でもないみたいだ。」
「一体何が起きてるんですかね。」
「何者かの意識的な妨害を感じるよ。こちらから何人かがＩＮしようと試みたんだけど、全て弾かれた。まるでユウスケ君だけを呼んでいるみたいなんだ。」
「一体誰が…。」
「あの世界の神とでもいう存在がいるのかもしれない。我々にとっては何になるんだろうね。」
「邪神ですか…」
「それこそゲームの中のラスボスだよね。」
「…。」
「ともかく、あれからコンスケは稼働し続けてる。ログアウトも受付ない。モニタリングは出来ないけれど、明らかに自らの意思としか呼べないもので動いているみたいだよ。」
「何か保険はかけてなかったんですか？」
「ある。あのゲーム内の再起動キーである天国の門を発見出来れば大丈夫…だと思う。７つの地獄の門のうち一つがそうなんだけど、ランダムなんだよね。メインシナリオとして配信する予定だったんだよ。」
「コンスケのとこに行って、勇者よ目覚めなさいというわけですね。」
「そんな感じ」
「受け入れるでしょうか？こんな現状を。」
「未知だね。そもそも、ユウスケ君そのものがあっちで動いているのかもしれないよ。とにかく可能な限りのサポートはする。行ってくれるね。」
「まぁ自分の為でもありますし。」

・・
・・・・・・・・・・・・・・・

「とまぁそんな感じ。俺がユウスケだよ。」

「え…と…。」

「全然分かんないよね。とりあえず俺と君は同じ魂持った兄弟みたいなもんだよ。」

「姉妹と言いましょうよ。」

「だって俺は男だもん。」

「見た目も身体も女の子ですよ。というか私と同じなんですよね。」

「んだよ。」

「むむむむむ…。なんか一番釈然としないです。」

「他は信じるの？」

「信じるも信じないも、私は昔の事なんて何も覚えてないんですもん。別に信じてもいいんじゃないですか。」

「前向きというか失うものがないってのは強いね。」

「それ褒めてます？」

「褒めてるよ。」

「それで私はどうすればいいんですか？」

「このままここで働いてもいいし、俺についてきてもいい。とりあえずは…」

「はい…。」

「なんかデザートちょうだい。」

この人…わざとやってるのかな…。

玉葱目に染みても…（後書き）

なんか修正されてなかったので再度修正。

あいでんてぃてー（前書き）

執筆中々進まずようやくの投稿です。

あいでんてぃてー

結局デザートまで平らげたユウスケさんは満足したのか親父さんを探しに行った。今日はそのまま泊まるつもりらしい。
私としては、口ではああ言ったものの、考え出すと頭がぐるぐるしてきたから早めに部屋で休む事にした。気付けば外はもう暗いし。
レストランが一階、兼任の宿屋が二階。さらに三階の屋根裏部屋が今の自分の部屋。昔は物置だったらしくてちょっと狭いけど、余ったベッドを入れてくれて、眠るには充分。私がスモールサイズだから…というのでは断じてない、…きっと。
頂いたお給金（基本日払い＆ａｍｐ；チップ）でちょこちょこ買い足した日用品、ちょっとの服、そして女の子なんだから…という理由でお袋さんがくれたスタンド付きの鏡。
ベッドに横になりつつ、その鏡に写ったユウスケさんと同じ顔を見つめながらまた考える。
自分の過去を知りたいと思った事はあったけど、他人が全て語って、はい君というものはこれだよ！…って言われてそうなんだって納得して受け入れられる人なんているんだろうか。
理屈は通るけど、荒唐無稽だし、感情的には納得は中々出来ない。信じられるのは、自分にはほぼ何もないという事実と、あの人の姿形があまりにも私に似過ぎているという事だけ。
今の毎日の生活に愛着はあるけれど、記憶が戻るまでに仮り暮らしだってのはどこかで思ってた。だけど、いきなり答えからぽーんっとやってくるなんて思いもよらなかった。
そもそも、自分って何なんだろう？コンスケって名前は多分本当だと思うけど、これも、もしかしたら違うのかもしれない。「狐族」だよって言われても自分以外は見たこともないから（今日までは）、そういう種族はホントにはいなくて私一人だけなのかもしれない。
そうやって全て疑ってしまえば私には何もない。自分で築き上げた

ものがほとんどないんだ。
私は依って立つものがないんだ。
じゃあ記憶さえあれば私なんだろうか？記憶があったら今こうやって考えている私はいたのかな…。
そんな事をぐるぐる考え続けて布団に横になり…いつの間にか眠ってしまっていた…。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・
「あぁぁぁぁぁぁぁあ！！！！寝坊したぁぁぁぁぁぁああああ！！！！！！」
目が覚めたら外はバッチリ明るい。太陽さんがこの部屋に当たり始めたら起きていなきゃなのにぃぃぃぃぃ！！！もう通過しかけてるじゃないのよぅ。
慌てて乱れた髪の毛と尻尾に櫛を通し（これは必須だよ！）、鏡でお顔チェック！
ちょっと目の下にクマがいる〜〜〜。
とりあえず大丈夫だと判断して急いでレストランへ。

「おはようございます！すいません！寝坊しました！」
配膳用のエプロンを巻いて、髪の毛が料理に入らないように三角巾を巻きつつ慌てて厨房に入った私が見たのは、高速で動く親父さんとおかみさん。そして何故かユウスケさんだった。
「親父さん！ポークソテー3つ追加！おかみさんセットのサラダを後5個お願いします！」
「ユウちゃん！今のでポーク終了だ！チキンかパスタランチに振ってくれ！！」

「了解しました！！」
「えぇぇぇ…なんでユウスケさん働いてるんですか！？お客さんでしょう！？親父さんもおかみさんも馴染んでるし！」
「コンスケよ…そこにお客さんがいる限り、走らねばならんのだよ…。ふっ。」
なんかカッコつけてそう言い放ち、水差しを持ってお客さんの高速移動するユウスケさん。速い…むしろ疾い。
「あぁコンちゃんおはよう！とりあえず洗い場回ってくれ。いやぁ聞いたよ。ユウちゃんは双子のお姉ちゃんなんだって？言ってくれれば昨日ももっと豪勢な食事出したのに。」
「そうだよコンちゃん。昨日は随分話し込んだんだって？体調悪いみたいだから休ませたってユウちゃんに聞いてたから無理せず寝ててもいいのよ…といいたいところだけど今日は大盛況なのよね～。これもユウちゃん効果かしら。呼び込みしたり、段取り考えたりすごいのよ。」
「え…あ…はい…？？」
とりあえず混乱し続けながら洗い物を続ける私を尻目に、三人は見た事もない速度でお店を回し続けるのでした。

「ありがとうございました～～～！」
「毎度あり～～～！いやぁしかし助かったよユウちゃん！」
「いえいえ～身体が勝手に動き出す～って感じですよ。」
「でもやっぱり双子の姉妹よね。見た目だけでなくて筋がいいのもソックリよ。コンちゃんもちょっと教えたらすぐ覚えたわよ。」
「ビクビクしながらですよ～～。それにあんな速度で動けませんよ私なら。」
「そうよね～。私達も毎日が今日の速さだったら身体が追いつかないわよー。」
とかなんとか言いながら、きっちりユウスケさんにデザートも薦めさせてたおかみさんは充分間に合ってたと思う…。

そんな今日の繁盛っぷり立役者ユウスケさんは涼しげな顔でお水を飲んでいる。なんで腰に手を当ててるんだろう…。
「さてと…そろそろ飯にするか。」
「二人はゆっくりしてていいからね～。」
親父さんとおかみさんは、売上が2倍近かったとホクホクしながら賄いの用意を始めた。忙しさも二倍だったけど。

「さて…ユウスケさん…。」
「コンスケお疲れ様。どしたん？」
「どしたん？じゃないですよ！なんですか姉妹って、何を二人に話したんですか？！」
「生き別れの姉妹を探して旅をしてたら偶然出会った。昨夜は遅くまで話し込んでたから起きて来ないかもしらんと、手伝いを申し出た。以上。」
「姉妹って、ユウスケさん男だって言いましたよね？」
「じゃあこの見た目で男です…とか、実は違う世界から来ましたって言ったら信じてもらえたと思う？」
「んぐっ…。多分無理だと思いますけど…。」
「まぁいいじゃないか、二人共喜んでくれたみたいだし。」
「まぁ…そうなんですが、なーんか釈然としないような…。」
「お前の仕事を奪ったのは悪かったよ。昨日あんな事話してきっと混乱してるかなと思ってさ…。迷惑だったか…？」
「いや…その…迷惑とかでは…ない…です…。」
なんか先に全部言われてしまい私がダダこねてるみたいだ…。
「手伝いがてらに情報収集出来たし、俺にも悪い話じゃなかったさ。」
「情報収集？」
「門の事。なんか怪しい建造物とかないかって配膳しながら聞いて回ったら何人か知ってたよ。」
「そんなものこの近くにありましたっけ？」

「あんま近くはないけど、山一個超えた所に隠者がいるらしい。その人がその建造物について知ってるらしい。」
「へぇ～。」
「で、どうする？今回ついてくる？まぁ朝早く出れば日帰りの予定だけど。」
「山一個超えるのにそんなに早いんですか！？」
「秘密兵器があるからね～。」
「秘密兵器！？」
「見てのお楽しみ。」
そういってユウスケさんは不敵に笑った。

あいでんてぃてー（後書き）

やっぱり携帯よりＰＣで書いた方が早いですね。
次回も早くＵＰしたいと思います。

きちゅね再び（前書き）

昨夜は十五夜でしたね。お月見の話もちょっと書きたくなりました。

きちゅね再び

あれから一週間経った。すぐにでも出発するのかと思いきや結局ユウスケさんは毎日お店を手伝い、親父さんとおかみさんを喜ばせた。私にも仕事のコツなんかを教えてくれて、随分効率よく仕事が出来るようになった。
余裕が出てくると周りが見えてくるもので、ユウスケさんの仕事をちょこちょこ見ていると無駄がない。
オーダー取りつつ、食事の済んだお皿があれば下げながらデザートを勧めたりお水を足したり。
一回ホールを回って複数の動作をやって帰ってくる。うぅむ。
しかも愛想がいいし、お客さんの冗談にもほいほいと乗っかってしまえる。すごいなぁ。
最近はユウスケさんが双子の姉だというのが広まり、狐姉妹見たさのお客さんまで来ていて呼び込みを特にしなくてもお店は大忙しだ。
息つく暇なし。なんかもう雨降って欲しい…。
そしてユウスケさんは仕事終わると、いつの間にかいなくなっていていつも姿が見えない。また情報収集してるのかな。夜には帰っては来ているみたいだけど。

今日も賄い食べ終えて自分の分を洗い物していると、ユウスケさんが出て行こうとするのが見えた。
「ユウスケさん！」
いつも何してるのかいい加減気になる。今日こそはついていってしまおう。
「どしたんコンスケ。」
「今日はついてきます。」
「別にいいよ散歩だし。」
「いつもの情報収集じゃないんですか？」

「情報収集は大体終わり。場所は絞れてるし、後は秘密兵器待ちなの。今日あたり来るんじゃないかな。」
どっかから何か届くのかな？街から村に届く定期便や商人さんが来るのはまだ先だったと思うけど。
「行くぞ～。」
考える私を無視してさっさか外に出てしまった。
「待って下さいよー。」
手をふきふき急いで後を追う。

「ユウスケさん、こっちは森ですよー。食材の仕込みでもするんですか？」
「うんにゃ、もうちょい歩けばわかる。ホラ着いたよ。」
「ここって…。親父さんに何か聞いたんですか？」
「何を？」
「私が始めに親父さんに発見された場所ですよ。」
そう私が気付けば寝ていたという例の切り株だ。
「あ～やっぱりセーブポイントだからそこから始まったか。」
「ほへ？？」
「俺も今回はここから来たんだよ。前回ログインした時の場所は何かアクセス不能らしくてね。」
全く何を言ってるか分からないけど、ユウスケさんにもゆかりのある場所なのかな？
「よいしょっと。社長～こちらユウスケ。応答どうぞ。」

Ｐｉ！！

「ひゃあ！なんか板みたいなのが出てきましたよ！！」
思わずユウスケさんの背中に隠れる。
「大丈夫取って食いやしないから。」
『はいはい、こちら社長ですよー。例の物は出来てるからいつでも

召喚ＯＫだよ。』
なんか文字が出てるみたい。手紙なのかな？
「お～やっとですね。了解しました。」
ユウスケさんはおもむろに持っていた針で指をチクッと刺すと、血を一滴地面に垂らした。痛くないのかな。

ぼう～～～ん

その場所から何やら白い煙と共に妙な音が…。そして煙が晴れた後には…。
「おぉ～きちゅね久しぶり。きちゅねも完全に回復したみたいだね。」
「ユウスケさん！魔法使えたんですか！？そしてなんですかこの可愛いもふもふのこは？ハグしていいですか！！」
「魔法じゃなくて召喚かな。あ～ほどほどにね。なんかどっかで同じようなことがある光景な気が…。」
「く～～んきゅーーん…ココ～ン」
「ふかふか～もふもふ～～えへへへへ～。」
「ほらコンスケそろそろやめなさい。首締まってるし…。」
「はいごめんなさいやめます。ごめんねきちゅねさん。」
「俺と同じリアクションしやがって…やっぱり俺らは思考回路とか同じなのか…。」
『いやぁ、お二人さん大分笑わせてもらったよ。あぁ、きちゅね君に幾つか装備をもたせたから使ってくれ。ただ、やはり高性能の物は送れない様になっているみたいだから、簡単なものだけどね。』
「了解です、ありがとうございます。丸腰よりは安心できますよ。」
『検討を祈るよ。』

Ｐｉ！！

きちゅねさんをもふもふしたりしている内に終わったのか、板みたいなものは消えていた。ユウスケさんはきちゅねさんから大きな鞄を降ろして自分で背負っている。
「なんか文字が出てましたけど、あれで会話してたんですか？」
「んだよ。こっちはしゃべってればいいけど、あっちからのは文字だから読まなきゃいけないんだよね。あれ社長ね。」
「しゃちょー？」
「この世界を創った人。」
「神様ですか！？」
「万能ではないけれどある意味そうかもね。そうすると俺は天使かねー。」
「え～。」
「何そのえーってのは。」
「特に意味はないです。」
「あるだろ～。お姉さんに話してみなさい…。悪いようにはしないから。」
「お兄さんでしょー。とにかく帰りましょうか。暗くなる前には帰りたいですよ。」
「はいはい。あ、きちゅねに乗ってもいいよ。」
「いいんですか！？」
「俺も乗ったしね～。二人で乗っても大丈夫らしいよ。明日は二人乗りだな。」
「明日？」
「お休みもらって行こうじゃないか、隠者さんに会いに。お弁当どうするかな。」
「ハイキングみたいですね。」
「その位の気楽な感じでいいよ。ほら乗った乗った。」
きちゅねさんはちゃんと姿勢を低くして登り易くしてくれる。よいしょっと登るとのんびりと歩きだした。おぉ視線が高いぞー。大人目線だ。そしてお尻の下にふかもふ。

「これは…素敵ですね。」
「だしょ？」
きちゅねの頭を撫でながらユウスケさんは笑顔で私を見る。いつもこういう顔してればお姉さんぽいのになぁ。

きちゅね再び（後書き）

秋めいてきましたね。スズムシの鳴き声聞きながら書いてました。

H．D（前書き）

ハードディスクではないですよ。

H・D

「行ってきま～す！」
「行ってきます。」
「二人とも気をつけるのよ～。」
「お土産は無理しなくていいからなー。」

親父さんとおかみさんに見送られてまだ薄明かりの中出発する。
昨日は宿に戻ってすぐに、今日二人で出かけるから休みたい旨を伝えたら快く承諾してくれた。
最近忙しかったし、だったら今日はお休みにするかーだって。
お弁当もこさえてくれたし、優しいなぁ。
ちなみに二人はきちゅねを見て可愛いなぁと部屋に入れる事を当たり前に受け入れてくれた。
昨夜はユウスケさんの部屋（2階の客間。私の屋根裏部屋より広い）で寝かせたらしい。いいなぁーずるいなぁー。絶対もふもふしながら寝たに決まってる。
そういえば今朝からユウスケさんの様子が変だ。旅用のマントとしっかりと巻き付け、フードもしっかり被っている。全然格好が見えない。

「ユウスケさん今日なんか調子悪いんですか？マント暑いと思うんですけど…。」
「え？あ！うん？大丈夫元気よ！うん。」
明らかにおかしい。目線逸らしっぱなしだし。何か絶対隠してる。
よーし、こうなったら…。

「あ！あんな所に空飛ぶ焼き立てパンが！」

「え！？どこに！？」

こんなよく分からない事を言って引っかかるなんて絶対怪しい。

「えいっ。」

「きゃあぁぁぁ！」

やたら可愛い悲鳴上げたよユウスケさん。ってこの格好は…。

「ち…違うんだコンスケ…。これはその…社長の趣味で…。」

しどろもどろになりながら真っ赤になってあたふたしているユウスケさんは見たこともない可愛らしいスカーフとスカートの格好だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

今朝方の事。

俺は早めに起きて、一緒に寝ていたきちゅねを起こさないように、そうっとベッドから出る。

もふもふのふかふかのきちゅねをハグしながら寝るとか、高級な低反発布団とか枕とか超えるね。羽布団も要らない…。いいですなぁ。

昨夜は今日の為に早く寝てしまったから用意は全くしていない。きちゅねハグして夢の中へＧＯだった。

昨日帰って来て部屋に置いたままの社長に送ってもらったリュックは、俺がよく使ってる親父から貰った官品の自衛隊鞄だった。凄い丈夫だし中身が濡れにくいからいいんだよね。

中に迷彩服入ってたら笑えないな。丈夫で防御力あるけどこの格好でやったら完全にコスプレだ。

お！これ前から使ってみたかった【長脇差し】だ。確かに強力な武器は送れないって言ってたからな。一応強化してあるみたいだ。研がなくてもいいとかだと助かるな。サバイバルナイフとかの軍用ナイフとかでもよかったけど。なんか銘が入ってる。えーと【稲荷】。凝り過ぎだしまんまだよ社長…。

後は何かな…。

「……コスプレかよぉぉぉぉ！！！」

和装セーラー服。黒いセーラーに臙脂色のミニスカートで袖が着物みたいに袂まで付いている。マニアックだ！絶対社長の趣味だ！なんでファンタジー世界にセーラー服！？あ、メモが付いてる。

『アバター用に見た目重視で作ったやつなんだけど、防御力は結構高いよ。送れるものの中で一番の防御力だから使ってね。後、コンスケ君ではなく、ユウスケ君が着ること。専用服にしてあるからね。』

「……しゃちょう……。最早呪いの防具ですよぅぅぅ……。」

コンスケ用にはピンクのフリルの服とか入ってた。どうみてもこれもアバター用じゃないのか…。…見栄え重視し過ぎ…。コンスケの武器は守り刀。銘は【葛葉】護身用の短刀だ。

「これ着なきゃ駄目だよ…な。」

いつのまにか起きていたきちゅねが固まってる俺をベッドの上から

見て首をかしげていた…。
・・・

「違うんだ…コンスケ…違うんだよ…あの…」
「可愛いですよ！なんで隠すんですか？」
「いやあの俺さぁ、女形とかやったことはあるけど、あれって着物でこんなミニスカートとか履き慣れてないし。女の子女の子したのとか…あぁぁぁぁ。」
おやま…とか言われてよく分からないけど、確かにユウスケさんはスカートも基本履かず、ズボンしか履いてなかった。
「よく似合ってますよ、ユウ姉ちゃん。」
「あぁぅぅぅ…。確かに身体はコンスケと同じでも男の意地がぁぁぁ…。」

何やら葛藤が随分あるみたいだけど、見た目は基本私と同じだし（私との性格の違いか、ユウスケさんの方が最近釣り目だ）、よく似合ってる。つまり私もこういう格好も似合うんだろうなぁ。

「私のはないんですか？」
「あるよあるんだけど…あるって言ったら朝からこの格好見せなきゃじゃん…。休憩の時にでも渡すよ…。親父さん達に見られなくてよかった…。恥ずかしさで多分硬直してたよ…。」

ユウスケさんは何かに負けたといった感じで白くなってる。
「さぁ、道を知ってるのはユウスケさんなんですし、先導して下さい～。」
「はい…。きちゅね～乗るよー。」

昨日の様に身体を下げて乗り易くしてくれた状態のきちゅねさんにユウスケさんは素早く乗ろうとする。

「スカートだから気を付けて下さいね。」

「わ…わかってるよ！」

いちいち顔を赤らめながらそろそろと動くユウスケさん。可愛いなぁ。

「ほらコンスケも。」

「はーい。」

きちゅねさんの上から手を伸ばしてくれる。こうやってちょこちょこ気を使ってくれるんだよなぁ。

「今日は二人乗りな上に、速度は昨日の比じゃないから、俺にしっかりつかまってろよー。」

「あーい。」

「よし！きちゅね、こっちの山の方向ね、ＧＯ！」

「のわぁぁぁぁぁ！！！！」

あまりの速度で今度は私が悲鳴を上げるの番だった…。

途中お弁当＆ａｍｐ；着替え休憩を一回挟み、山を一つ越えてさらにもう一個の山の中腹の滝の近くでユウスケさんはきちゅねさんを止めた。

「はーい、きちゅねお疲れ。」
「きちゅねさんありがとうね。」
「今度お稲荷さんを作ってあげよう。」
「お稲荷さん？」
「ふふ…今度ね。」

なんだろう。食べ物かなぁ。ユウスケさん料理も上手なんだろうなぁ。

「さて、ここみたいだね。」
「綺麗な所ですね～。」
「もうお昼ちょっと過ぎか。結構かかったな。」
「ユウスケさんが動揺しなければ多分もう少し早かった気が・・・」
「うっしゃい。」

また顔が赤くなった。いつもお兄さん的な感じだから、からかうとおもしろい。
滝に向かって張り出した岩壁の先に小さな家が一軒。周りは綺麗なお花畑になってる。香草なのかな？お店でよく嗅いだりする匂いも漂ってるけど、一番香ってくるのはラベンダーの香りだ。
ユウスケさんを先頭に、私、最後にきちゅねさんがとことこついてくる。

「ごめん下さ～い。」

ノックをすると中から声がする。在宅中みたいだ。

「はいは～い、どういった御用かしら？」
「村で門について知っている隠者さんがいると聞いてここに来たの

ですが。」

そうユウスケさんが応えると静かにドアが開いた。

「あら、可愛らしいお客様ね。狐が三匹も。私がその隠者H・Dよ。」

H・D（後書き）

自衛隊で採用されている備品はどれもスグレモノです。
基地によってはお土産で買えるのでかなりいい感じです。戦闘用糧食がおススメです！買えないけど、自衛官の迷彩服は本気で丈夫なので防御効果は確実に高い模様。
女形＝おやま（おんながた）ですね。アクション俳優が演じることはまずない…という訳でもなくやれと言われたらやるそうです。当然着物にカツラ、白塗りです。普通の男の人には慣れるまで葛藤があると思います。

H・D 2

うわぁ～綺麗なお姉さんだなぁ。なんかこう淑女って感じ。髪の毛銀色でサラサラだし、何か光ってツヤツヤしてる。服も薄紫色主体で何か全体として色気があるなぁ。ぽけ～っと見取れてる私をほっといてユウスケさんはさらに質問を続ける。

「その門の場所はどこですか？」

「慌てるこじきは貰いが少ないわよ。狐でもね。とりあえずお上がりなさいな。お茶でも飲みながら話しましょう。」

「あぁ…すいません慌てちゃって。お邪魔します。」

「お邪魔しまーす。」

「くーん。」

きちゅねさんもそのままついてきたけど、H・Dさんは何も言わず笑顔のまま客間に案内してくれた。

部屋には窓際にハーブが吊るしてあって、落ち着く香りがする。部屋の真ん中には大きな木製の机と椅子のセット。使いこんであるみたいで表面はとっても滑らかだ。棚には大量の本が綺麗に整頓されて入ってる。背表紙に書いてある文字は読めないなぁ。どこの言葉だろ。家具なんかはどれも年月を感じさせるものなんだけど、手入れがよくされていて味わいがある。

部屋の中を色々見てまわってるうちにH・Dさんがお茶を入れてきてくれた。これも凄くいい香りがする。

「うちの庭から摘んだハーブティーよ。身体にいいんだから。」
「頂きます。」
「いただきまーす。」
「…コン…。」

きちゅねさん熱いのは駄目そうだから冷ましてあげよう。黙ってきちゅねさんの分も出してくれたけど、飲むのかなぁ。

「いいお茶ですね…。」
「でしょ？土がいい上に日当たりも程よいからスクスク育ったうちのハーブ達なのよ。手入れしないとすぐに好き勝手生えるから大変なのよね。」
「ハーブ類は繁殖力旺盛ですからね。」

私がきちゅねさんの分をふーふーしてあげてる間になんか主婦の様な会話が続いていく。

「さて…本題ですが…」
「私もね…」

ユウスケさんの話を遮ってH・Dさんが話し始める。

「話してあげてもいいんだけど、我らが王もうるさいのよ。見極めろ…とか言われてるんだけど、荒事は嫌いなのよね…。もう真っ向唐竹割りされるのは趣味じゃないでしょ？ニンゲンさん…？」
「っつ！」
「ユウスケさん！」

穏やかな語り合いから、いきなり殺気立った気配でユウスケさんが

立ち上がり腰の剣に手をかける。

「例のヤツの仲間か。」

「…だから、荒事は嫌いって言ってるでしょ。こぼしたお茶は拭いてよね。最後まで話を聞きなさいな。」

「ユウスケさんとりあえず落ち着きましょうよ。きちゅねさんもお茶飲んでますし。」

冷ましてあげたらちゃんとお茶飲み始めたきちゅねさん。器用にカップを傾けてのんでる。さすがに持ち上げないでテーブルの上だけど…。

「その娘の言う通りよ。言ったでしょ慌てるこじきは貰いが少ないって。話はまだ終わってないわ。」

「…すみません…。」

「王からは見極めろなんて言われてはいるけど、別にやり方は決められてないわ。だから…。」

「だから…？」

まだ殺気立ってるのかユウスケさんが低い声でつぶやき返す。恐いよぉ。

「料理対決なんてどうかしら？」

ガッターン！

今度こそお茶を完全にこぼしながらユウスケさんはひっくり返った。

「よくわからん…が戦闘にならなくて助かった…。」

「料理対決かぁーユウスケさん何作るんですか？」

「肉類禁止で基本この辺りにあるものだけ…ならサラダか…炒め物

…いやパスタもいけるかなぁ。」

毒気を抜かれ、さらには料理のレシピを考える…と、ユウスケさんはぶつぶつ言いながら家を出て花畑に材料を探しに行った。

しかし、H．Dさん面白い人だなぁ。

「なんかすいません。姉が迷惑かけて…。」

「大丈夫よ、カップも割れてないし。お皿は木製のものにしておこうかしらね。」

「お願いします。でもなんで料理対決なんですか？」

「夕飯のおかずが増えるでしょ～。それにお客様がいるのに楽しまなくちゃね。」

マイペースだ…。でもさっきの会話幾つか気になるなぁ。

「さっき王…って言ってましたが、王様がいらっしゃるのですか？」

「あら？ユウスケ君から聞いてないの？あなた達が分離したきっかけ作った人よ。まぁ正確には人じゃないけどね、私も。」

「へ？」

「ある程度力を付けると変身出来るのよ、人間形態に。これ以上は内緒。王は封印されて長かったからね。また色々別なんだけど。」

「？？」

「ともかく、あの子を支えてあげてね。二つに分かれてしまったのは私達も想定外だったけど、中々うまくやってるみたいじゃない？」

「はぁ…私が支えられてますよいつも。」

「それも甘えの一種かもしれないわよ。隙を見せないタイプもいるんだし。とりあえず私も料理作りにかかろうかしらん。」

話しは終わりとばかりにH．Dさんはエプロンを付けてキッチンに向かった。

「食材は肉類以外はあった…パスタかな…。」

俺はぶつぶついいながらも複雑だった。あの物言いは明らかに全部分かってる。分かった上で楽しんでる。私達と言ったが何人か門の守りに入っているのか…。一人ずつでもあの時のレベルのが来たら勝てる気がしない…。コンスケを残してきてしまったけど、明らかに戦闘する気はなかったから大丈夫だろう。いざとなればきちゅねに逃がして貰う事も出来る。

気付けばハーブ園を越えて、ラベンダー畑の辺りにまで来ていた。この身体で嗅覚が上がってるからあんまり長くいると鼻が麻痺するかもしれない。

そういえばあのH．Dもラベンダーの香りがしていた。

ラベンダー畑の端に何かある。近付いてみると墓だ。【L．D】とだけ書いてある。H．Dの家族のものかな。一応礼だけしておこう。

「さてそろそろいいかしら?」

「OK!」

「私はこれよ!」

やたらとテンション高いH．Dさんの作ったのはピザだ。ルッコラやバジル等の香草たっぷり、チーズもたっぷり乗っている。採れ立て新鮮のいいハーブを使っているから香りが凄くいい。

「俺はこれだ!」

ユウスケさんも負けない位高いテンションで出してきたのは、パスタだ。刻んだバジルをオリーブオイルでソースにしていて、松の実と茸が爽やかに彩る。
いつの間にか審査員にされた私を羨ましそうにきちゅねさんが見ている。後で分けたげよう。そもそもこれは明らかに４人用位の量がある。私１人で食べきれるわけがない。
どちらも一口、二口程食べてみる…これは！

「うぅむ甲乙つけがたしです…。でも！」

神妙な顔した二人がゴクリと喉を鳴らす。

「パスタの勝ちです！」
「よっしゃぁぁ！」
「負けちゃったかぁ。あらら残念。」
「松の実の香ばしさで若干ユウスケさんのパスタの風味がよかったです！」
「うぅむ松の実なんてやるわね。」
「滝から流れて来ていたのをたまたま見付けただけですよ。Ｈ．Ｄさんも鮮度を活かしたピザよかったですよ。」

熱く握手を交わす二人に何やら友情が芽生えたみたい。よいことだぁー。

「取り皿持ってきますね～。」

仲良くおいしく料理を頂き、また食後のハーブティーを飲んでまったり。

「あぁそうそう、これ渡しとくわね。」

H・Dさんがユウスケさんに手の平大の薄い板みたいなのを渡した。真珠色っていうのかな、角度によって色が変わって綺麗だ。

「私の鱗だから大事にしてよね。それがあれば滝の裏の門の所に行けるわよ。」

「うろこ？」

「解った。大事にしますよ。」

なんだかよく分からない私をほっといて二人は何か納得したようだ。

「洗い物はやっておくからさっさと行ってきなさいな～。泊っても構わないけど、今日中に帰った方がいいんでしょ？」

「あぁそうだった。すっかり寛いじゃった。ありがとうございます。」

「うちのお店にも今度来て下さいね～。」

「コーン。」

H・D　2（後書き）

ハードディスクやレーザーディスクじゃないですよ～。
ユウスケが作ったのがジェノベーゼ。
H・Dさんが作ったのはハーブピザかな。
どちらもうちで作った事があるものを出しています。

原初の愛は我を作る・・・

「ここか…。」

鱗が反応したのか、滝壷の所に飛び石の様なものがほのかに光りながら浮かんでいる。暗くなり始めてきているから目立つ。
そこを渡っていくと、何故か滝の水に濡れずに通過出来た。
後ろでコンスケがあわあわ言いながらついてくる。身体能力は同じのはずなのに、危なっかしいなぁ。
案の定滝の裏は洞窟になっていて、一人ずつしか進めない程の狭い道をくぐると大きな空間になっていた。そしてその奥に黒い塊…門だ。

「ふわ〜〜おっきいですねー。」

コンスケ背伸びしても届く訳ないぞ。
俺ときちゅねは前回の事もあるから、警戒したまま近付いていく。
今のところ変化なし、脇差しはいつでも抜けるように右手は柄辺りに左手は鞘に触れておく。

「これだな。」
「これが門ですか?」
「そうだ、もしかしたら何かが急に現れるかもしれないから警戒しておいてくれ。」
「わ・わかりました。」

さすがにそろそろ気を引き締めてもらおう。二人ともスッパリ切られて四人になるとか笑えないし、そもそもそんな事になる前に死ぬ可能性も高い。

見た所、この前の門と形は同じだな。特に材質も違いは見られない。仕方がない、触るか。

「コンスケ下がってろ。きちゅねのそばを離れるなよ。」

「ひゃい。」

俺が真剣な声を出したからか、コンスケも緊張してきた。

ぺたり。冷たい石の温度だ。それ以上は何も感じないし、何も変化は感じられない。

「ハズレか…。」

「当たりもあるんですか。」

「うむぅ…。」

思わず詰めていた息を吐き出す。コンスケもきちゅねも俺が脇差しから手を放し、気を緩めてからようやっと気を抜いた。

「しかし立派な門ですね～。これ開かないんですか？」

「ロダン氏の一番始めの設計の時点では美術館の入口にする構想だったらしい。でも結局間に合わなかったとかで、普通に美術品として作ったらしいから、特に開いたり動いたりはしないよ。そもそも裏側は壁との間に隙間が少しあるだけだろ？門を開けられたとしても何もないよ。」

「あーほんとだ。しかしなんか装飾ゴテゴテですね。」

「ダンテの神曲という作品にインスピレーションを得たらしい。地獄の門というタイトルだしね。」

「地獄…？」

「悪いことした人が死んだ後に行くところらしい。実際はわからん。死んだ経験はないからな。あ～一回あるか。意識なくなって終わりだったから覚えてないわ。」

「へぇ〜。」
「まぁ真似すんなよ。文字通り死ぬほど痛いからな。」
「真似したくもないですよ！」
「さてと…何もないようだから帰るか、そろそろ完全に暗くなる。きちゅねー狐火〜。」
「コーン！」
「あら明るい〜。」
「触ると熱いから気をつけろよ。」
「はーい。あれ？」
「どうした？」
「門の上の方、色が付いてますよ。」
「本当だ。きちゅねあの辺りに火を持ってきてくれ。」
「コン。」

真珠色のドラゴンのレリーフが付いていた。勿論オリジナルにそんなものはない。今回ここに来る前に嫌になるほど写真を見せられて覚えさせられていたから間違いない。意味はあるのか…社長に報告しておこう。

「ふぅ。目を凝らしてて疲れた。あくまで飾りみたいだ。」
「じゃあ帰りましょう。夕飯に間に合いたいです。」
「そうだな。」

洞窟を出ると、もう辺りは大分暗くなってきていてH．Dの家の明かりも点いている。
休憩なしで一気に帰れば、そう遅くならずに帰れるだろう…。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「随分静かになったわ。たまには賑やかなのもよかったでしょう？あんまりお客さんも来なかったし。B．Dもお店があるからって中々会いに来てもくれないのよ。まぁ、あの子達の事もあるから今度は私から会いに行ってくるわ。」

狐達が去った後の家近くの墓にH．Dが声をかけている。

「ラベンダー水置いておくわね。お休みなさい父さん。」

返事をするかの様に風がラベンダー畑をざぁっと駆け抜けていった。

原初の愛は我を作る・・・（後書き）

【L．D】に捧げます。

温泉町ツリータウン（前書き）

久々の更新です。
世界観も設定してきたので、今後始めの辺り等に修正する可能性があります。

温泉町ツリータウン

「あ～～ぁ～ベトベトするぅわぁあ……。」
昨日から宿屋の風呂窯（薪を入れるタイプだ）がぶっこわれてしまった…。

普段は仕事明けに宿屋のそこそこ広い共同風呂でのんびり汗を流していたからなぁ。昨夜はお湯を沸かしてもらい、濡らしたタオルで身体を拭くだけというのでしのいだが結構きつい。
狐の一種？だからか汗かく量は少ないんだが、やっぱ昼間働いてると汗はかくからシャワー位浴びたい。むしろ疲れを取るにはやはり湯舟に浸からないと…。

「コンスケ～生きてるかぁー。」
「無理ですぅ…。」

屋根裏部屋で溶けているだろうコンスケに声かけてから入る。
案の定コンスケもダラダラ溶けている。

「今日も厨房でお湯沸かしてもらうか…？」
「身体拭くだけですからねぇ…。なんか毎日わざわざ沸かしてもらうのも悪いですし…。」
「尻尾拭けないしなぁ。川に水浴びに…」
「それもなんかヤです。」

うぅむ…我が儘なヤツめ。中途半端に現代人的な思考め。
大体が、ファンタジー世界なのに、共同の風呂付きの宿屋に拾われた時点で結構甘やかされてるからなぁ。まぁ社長もどんだけ考えて作ってるんだか…。こちとらドラム缶風呂レベルとか、部屋に風呂

桶置いて沸かしたお湯入れる（中世風？）とか、川で行水…とか覚悟してたのに、普通に旅館の風呂レベルだもんなぁ。

村共通の銭湯もあるらしいけど、混浴…。きついなぁ。一応身体は女の子だから周りも気を使うだろうし。

村の女の人達は大体まとめて入っちゃうらしいが、俺達が働いてる時間にささっと入ってるみたいだしなぁ。

ヒーローショーのテントの中で男女ぐちゃぐちゃに混ざって着替えたりしてたけど、やっぱ今の状態だとな。

「時間見計らって銭湯行くか？二人で行けばまだ恥ずかしく…ないかもよ。」

「エー。」

なんか風呂入れないストレスでグダグダだな。気持ちはわかるが…。

「コンちゃんユウちゃーん！」

「はーい！」

「は～い！」

「お風呂直るの一週間かかるってー！」

「えぇ～～～～！！！！！！」

流石に二人の声がハモった。

「コンスケよ…由々しき事態だ…。」

「そうですね…。」

「コン～？」

寝ていたきちゅねも起こして作戦会議である。非常自体宣言発令中である。

「銭湯はもうすぐ時間的に男祭になる…。」
「はい…、そこに特攻なんてありえません。」
「昨日の方法では、我々の尻尾まで満足に洗えない。」
「はい…付け根が既にイヤンな感じです…。」
「隣町に素敵な温泉があると聞いた。」
「なんと！」
「しかも男女別だ！」
「素敵！」
「コーン？」
「ただ…」
「ただ…？」
「俺と一緒に入るの平気か…？」
「あぁ…そこは大丈夫です。どうせ私の身体じゃないですか。」
「じゃあ行くか。」
「はいです。」
「コーン？」

着替えなんかをまとめ、二人してきちゅねに乗り込む。目指すは隣町ツリータウンだ。きちゅねの足ならすぐに着くだろう。

ツリータウン…と町を名乗ってるけど、正直リーフタウン（村レベル）と同じでそんなに賑わってないだろうと思ってたら湯治客が結構いる様だ。
温泉饅頭とか温泉卵とか売ってるってどこでも同じなのね…。お土

産買って帰るか。
「コンスケどこのお風呂にしようか？」
「沢山あって選ぶの大変ですね。」
きちゅねを後ろにタラタラ歩く。客引きとかはあんまないのね。
「お！ここなんていいんじゃないかな？」
「どれどれ～。いいんじゃないですかー。」
ちょっと洒落たホテルの様な外観の建物の前に看板に色々書いてある。なんか竜の彫刻まで置いてあって豪華だな。しげしげと見ていると頭に鉢巻きを巻いてハッピ（風）を羽織ったお兄さんが出てきた。
「可愛いお嬢さん方いらっしゃーいませ～。うちはお肌スベスベになって疲れも抜ける炭酸風呂がウリだよ！」
「素晴らしい！」
「ユウスケさん行きましょう！！」
「はーい！二名様ご案～内！」
ニコニコしながら俺らを先導する。しかしこの人背が高いな。親父さんよりでかそう。
「（なんかお食事処みたいな客引きだな…。）」
「（ですね。）」
「コーーーン。」
「おぉ！なんか内装も落ち着いてるし、いい感じだなぁ。」

「うみゅー。これは安らぎますね。」
「小旅行って感じだなぁ。」

ホテルの様な素敵な館内に案内された俺たちは履き物を脱いで、結構リーズナブルな受付を済ませ、共用のロビー部分を通って脱衣所へ。勿論女性用だ。きちゅねも当たり前についてくる。何も言われなかったけど風呂屋からすると何扱いなんだろう？ペット？
すぱぱーーっと脱いで浴槽フロアへ。
「コンスケお先！お～豪華だ！」

山あいに開放的に作られたお風呂場からは遠くまで風景が見渡せて、これから沈もうとする太陽が随分と幻想的だ。

「綺麗ですね～。」

いつの間にか来ていたコンスケも一緒に見とれていた。

「今日という世界が終わって、また明日の朝に世界が始まるんだな。」
「毎日生まれ変わってるみたいですね。」
「そうかもしれないな。」
「身体洗いましょうよ、風邪ひいちゃいますよ。」
「だな。ん…コンスケしっかりとタオルで隠してんのな。」
「だって恥ずかしいじゃないですか～。ユウスケさんこそ腰回りだけじゃなくて全部隠しましょうよ。」
「胸隠す程ないんだからないんだからいいじゃないか。」
「…！！…う…あぁ～～…。それでも…それでもぉぉ…」
「あ…ごめん…コンスケほら…背中洗ってやるから許してくれよ…。」
「髪の毛も洗って下さいよ…。うぅ…ペタンコだって需要あるもん

…。あるんだもん…！」
姉ちゃんで巨大なの見慣れてたからなぁ…。俺はどちらでもいいし、揺れないから動き易くてありがたいんだが。大きいと肩凝るから大変らしいけど、そんな事言っても慰めにもならないな…。あぁ～コンスケがこの世の終わりの様な顔して床に「のの字」書いてる…。
用意してあった石鹸と身体洗うタオルを取り出して、コンスケに渡す。
「前洗ったら声かけろよ～。」
「…はーい…。」
こいつ、へこんでるからって尻尾で受け取りやがった…。器用だな。
とりあえず俺も汗を流すか。

「ほらちゃんと目をつむってないと目が痛くなるぞ。」
「そんなんわかってますよーだ。」
「俺もだけど髪の毛長いから洗いづらいだろう。」
今二人共、肩甲骨位までの長さはある。
「普段は尻尾で桶絡めて、下向いたままシャンプー流してます。水で濡れた髪の毛で顔が埋まると大変なんですよね。」
「俺は桶にお湯ためてそのままガシガシと目つむって洗ってた。ずっと下向いてると疲れるよな。」
「気合いですね…。あ～そこ気持ちいいです。なんだか慣れてますね。あれ～？ユウスケさん女の子とお風呂入る機会多かったんですか～？モテモテですか～？」
「んなわけあるか。姉ちゃんの髪の毛洗わされてたんだよ。面倒臭いからやれーって言われてな。」
「ふふふ～仲良いんですね。」
「まぁ家に大体二人だけだったしな。」

「そうなんですか？」
「あぁ、親父もお袋も仕事で家に滅多にいなかったからな。おかげで俺も料理随分慣れたし、大抵の事は出来るぞ。姉ちゃんはあんま何も出来ない…つーか出来てもやらないなー。」
「ほへ～。」
「ほーら流すぞ。」
「あいー。」

「ふ～～～～。」
解放感溢れる露天風呂。
贅沢だな。都会に住んでいると自然が豊かなのは貴重だと感じる。
空気も料理もうまいし。
「ほにゃら～。」
「コンスケお前いつもそんなに溶けてるのか？」
「今日だけですよー。髪の毛も凄くサッパリしたし。尻尾も綺麗。言う事なしじゃないですか～。」
「確かに。」

結局俺も髪の毛洗ってもらい、尻尾も泡立てて綺麗にした。特に尻尾は盛大に泡立てるから他にお客さんがいたら中々出来ない。貸し切り状態は最高だ。ちなみにきちゅね身体を洗ってやった後は勝手気ままに炭酸風呂や足湯を楽しんでいる。頭にタオルでも乗せたら似合いそうないい顔してるし。

「なんかー。」
「んー？どうしたー？」
「こーやって見上げてると星空に吸い込まれそうですねー。」
「んーだなー。そういや星ってさー。」
「んー。」

「今見えてる星の光って何千年も前のものらしいぞー。」
「どーゆーことですかー？」
「あんまりにも遠くに星があるから光が届くまでに時間がかかるんだってさー。」
「へー。あの星が実際光った時にはここには誰がいたんでしょうねー。」
「案外うちらみたいな狐が同じ様な事を話してたのかもな。じゃなかったら神話の人達かもなー。」
「じゃあ、きっとーきちゅねさんもいましたよー。」
「かもなー。」
なんだかそんな光景を想像して笑ってしまった。

「ゆだったー。」
「顔赤いぞ、大丈夫か？」
「だいじょーぶれすー。」
「駄目だ…。」
結構長湯したなーとコンスケに声かけて出たのはいいが、俺と違い途中で一度も身体に水かけたりしなかったコンスケは完全に湯あたりしてのぼせた様だ。まさに溶けてる。
仕方ないので用意されてる浴衣（みたいな服。着易い。）を着せてやった後扇いでやっている。
「しゅぽー。」
「うーん。なんか冷たい飲み物でも…」
え！？なんでここにこんなものが売ってる！？まぁいいやもう突っ込むのやめた。
「コンスケこれ飲んでみろ。」
「なんれすか？コレ？」
もっきゅもっきゅと飲み始めた。
「コレ！美味しい！」

あ、シャキッとした。
「ちなみにこれはフルーツ牛乳だ…。」

温泉町ツリータウン（後書き）

作者が温泉に入りたいという願望もあります…。

F．D（前書き）

コーヒー飲むと酔っぱらうのはコンスケだけです。

F・D

「そう、うちの看板商品のフルーツ牛乳だぜ。」

ロビーで休んでいる俺らの所に案内してくれたお兄さんが声かけてきた。

「いいですね！フルーツ牛乳！」

「そうだろう、そうだろう！」

なんかやたらテンション高いなこの人…。赤い髪の毛がさらに、なんだか、うっとおしい……。

「うちの素敵ラインナップに、温泉卵、温泉まんじゅう、川で取れた魚の塩焼きなんてのもあるぜ！」

「素敵！」

なんか渋いなぁ…。この世界だと斬新なのか…？

「お！そっちのお嬢ちゃん！何も飲んでないじゃないか！ホラこれ飲みな！俺の驕りだぜ！」

声デカイなぁ。しかも渡されたのはコーヒー牛乳か。イチゴ牛乳とかはないのか。

「イチゴ牛乳忘れてた！パックでは見たあったけど、瓶では見た事なかったなぁ。ありがとう！」

「あぁ…ハイ…。」

「ユウスケさんなんですかその素敵飲み物は！？」

「あぁ…うん、コーヒー牛乳だよ。飲むか？」
「もちろんです！」
「あ～そんなに一気に飲むなー。俺の分残しとけよ。」
「ぷはぁ美味しいです！」
あー飲み切っちゃった…。少し飲みたかったのに。アレ？一回シャキッとしたコンスケがまたぐにゃぐにゃしてる…。
「おいコンスケ大丈夫か？」
「だーいじょーぶれ～すー。」

なんか耳も尻尾もくたりとして酔っぱらってるみたいになってるなぁ。もう溶けて動かないからきちゅねに乗せとこう。

「きちゅねゴメンな、頼む。」
「コーン。」
体を乾かしてたきちゅねにぐんにゃりしたコンスケを乗せる。
「おいおいそっちの嬢ちゃん大丈夫か？湯あたり直ってなかったのかな。」
「そうみたいです。ちょっと横になれる所ありますか？」
「今日は宴会入ってないから宴会場に寝かしといていいぜ。」
「ありがとうございます。きちゅね行くよー。」
「ココン。」

洋風のホテルの外観、内装なのに宴会場は畳…。なんでやねん。
また突っ込んでしまった。
座布団を枕代わりにして、コンスケを寝かせる。
「ユウスケさんが４人に増えてる～。分身の術覚えたんですか～？」
「そんな高度な技覚えてたらお店で使ってるわ。ほら寝てなさい。」
「ひゃ～い。」

素直に眠り始めた。酒癖も悪そうだな…。
「なんかすいませんお兄さん。」
「いいって事よ。それだけうちの風呂が気持ち良かったって事だろ？ありがてぇよ。あぁ俺の事はお兄さんじゃなくて気軽にF．Dと呼んでくんな。」
「…F．D…ですか？」
「おぅよ。まぁ愛称というか通称みたいなもんだから気にんすんな。」
まさかね…。明らかに俺を女の子扱いしてるし、そういう気配もないし。大丈夫かな。

「それでよぅ！お客が来たのはいいんだがご年配ばっかりなんだよぅ！コンセプトは間違っちゃないと思うだがよぅ！」
「はぁ…。悪くはないとは思いますけど。」

何故か俺はそのままF．Dに捕まって宴会場でクダを巻かれている。
といっても二人とも飲んでるのはフルーツ牛乳とかコーヒー牛乳のはずなんだけど…。雰囲気酔いってやつなのかな？
F．Dはこの温泉旅館のオーナーをやりつつ、このツリータウンの温泉協会の顔役みたいなものもやってるらしい。で色々PRしてるらしいんだが、若い客層が来ないと嘆いてる。確かにこういう温泉街ってご年配多いよね。

「お隣のリーフタウンから若い衆がまとめて来る時あるんだけどよぅ、季節毎にしか来ないんだよ。」
「あぁ鉱山で働いてる人達の慰安旅行ってここなんだ。」
「おぉ！嬢ちゃんリーフタウンから来たのか！いつもありがとよ！後でお土産に饅頭持って帰るといい。」

「あぁ…ありがとうございます。」

やっぱりあれか、レジャー施設化しないと駄目なのかな。そもそも定期便が少なのと、馬飼ってるお宅少ないし旅は気軽に行けるものでもないだろうなぁ。送迎バスとかないし。後はあれか美容とか名所で売り出すとか…。そんな事を現実世界の事を伏せつつ軽く話してみる。

「定期便…。専用の馬車で温泉行きとか作るか…。後は名所といったらあれだな！嬢ちゃんちょっとついて来てくれ。」

「？あぁ…はい。」

何かあるのかな。コンスケを放置するのは怖いけどきちゅねが横にいるから大丈夫だろう。

温泉旅館の裏側、山に少しだけ入った所に野ざらしにそれはあった。

「これなんていかにもご利益ありそうだろ！」

「……えぇ……。」

もう突っ込む気も起きない。地獄の門でございます。この人守護してるとかのH・Dと同じ感じじゃないのか？適当過ぎる…。しかもご利益とか言ったら尚更ご年配向けの感じじゃないか。

「この黒光りする石！ちょっと裏手にあるというワクワク感！いいだろう！」

「ちょっと触ってみていいですか？」

「おぅよ。」

警戒する気も沸かないな、ペタペタと触ってみる。黒曜石かな？冷たくて気持ちいいや。上の方に赤く塗られたドラゴンのレリーフがあるな。案の定何も起きない。これもハズレか。じゃあもう観光名所でも何でも好きにして下さいな…。

「せめて若者向けにするならパワースポットとか言いましょうよ。」

「お！それ採用！流行りそうだな。」
「朝焼けや夕焼けも綺麗に見えそうな場所ですし、それを見た後うちの温泉へどうぞ的なＰＲでいいんじゃないですか…？」
「いいねいいね！」
温泉旅館へ戻りつつ、テンションがまた上がっていくＦ．Ｄさん。
俺のテンションは…言うまでもない。

後日、早速始まった温泉直行便（もちろん馬車）が宿屋にチラシを置いてった。
曰く、「パワースポットでご来光を眺めよう！その後は温泉でしっぽりと！」「美容と健康に素敵なひとときを。」
なんかうたい文句が古いのはもう突っ込むのすら諦めた。つーかチラシのイラストに狐娘使ってるとか許可取られてないぞ！今度文句言って温泉入り放題券を奪ってやる！

F．D（後書き）

お風呂でお酒飲むと美味しいらしいですが危険なのです。

キノコをもとめて（前書き）

お待たせしました。
今回は難産でした…。

キノコをもとめて

「明々後日までにポルチーニ茸を取って来て欲しい。」
「またレアな食材を…。」
「なんですか、『ぽるちーに』って？」
「香りが良くてシャキシャキと歯ごたえもいい美味しい茸なんだよ。煮込んだりすると美味いんだ。贅沢なんだぞー。」
「ユウちゃんよく知ってるね。」
「えぇ、家でよくパスタとか作ってましたから。」

仕事が終わって、今日も一仕事終えたと和んでいる私達に親父さんがそんな頼みごとをしてきた。
なんでも昔お世話になった人が、明々後日の夜に食べに来るらしいんだけど、仕込みもあって手が離せないそうだ。

結構珍しい茸で、この辺りだと水晶の谷という所でしか採れないらしい。水晶の谷にはポコポコ生えてるらしいけど、虫食いが多くて選別したりするのに時間がかかるものらしい。
ここから馬で一日かかるかどうか…位の距離だって。
きちゅねさんの速さなら、明日朝早くに出発すれば期限までには帰ってこれるかな？

今回の旅は野宿の必要もあるからと、ユウスケさんがテント等をしゃちょーさんに発注すると言って出ていった。
私は食糧の調達に村の雑貨屋さんへ。お会計が済んで買い物袋に物を詰めていると声をかけられた。
「おぉコンスケちゃん奇遇だね。」
「あれマスター？どうしたんですか？」

烏龍亭のマスターだ。最近お店に行ってないから久しぶりな気がする。
「俺も買い物位するよ。シナモンきらしててね。コンスケちゃんこそ、こんな時間にそんなに買い込んで明日はキャンプでもするのかい？」
「そんな感じです。ちょっと水晶の谷まで茸採りに行くことになって。」
「水晶の谷か…。」
マスターが渋い顔になった。なんだろう？
「あそこはC・Dの管轄だからな…。何もなければいいけど。よしこれを渡しておこう。」
「なんですかコレ？」
「お守りだよ。必要ない事を祈ってるよ。気を付けてね。」
マスターから何か薄い板みたいなものをもらった。手の平より小さい位のサイズで、光が透けない位に真っ黒だ。
私にお守り？を渡してくれた後、シナモンが入った瓶を持ってマスターは行ってしまった。お礼は今度言っておこう。

買った物を二階のユウスケさんの部屋に運び入れる。
「おかえり～。おい…コンスケ買い過ぎじゃないのか？リュックに入る量を越えてると思うぞ…。」
「あれ？だってユウスケさんいっぱい食べるから。」
「確かに俺は結構食べるけど、荷物になるし、現地調達出来るものもあるからそんなには必要ないよ。まぁ入らない分は置いていこう。」
「はーい。」
確かに鞄はある程度大きいけど、今回は寝袋やテントも持ってくから結構な量になっていた。失敗したなぁ。
「よし、これを詰めて…後は明日でいいかな。明日は朝早くに出発

して、暗くなる前には水晶の谷へ到着、一泊して明るくなったら茸採って帰る。期限の日の前日には帰ってこれる予定。何か質問意見文句その他ある人？」
「はーい。おやつにバナナは入りますか？」
「つぶれたら嫌だからなしですー。つーかベタなネタを…。ほらさっさと寝るぞ。きちゅね連れてベッドにＧＯー。」
「はーい、お休みなさい。」

翌朝早く宿屋の前で親父さんの見送りの中、ユウスケさんはきちゅねさんの脇に紐で荷物を括り始めた。
「帰りは食料品が茸だけになって軽くなる予定だ。我慢してくれよな？きちゅね。」
「コーン。」
「わかったわかった。ちゃんとブラッシングもしてあげるから。」
「温泉にも連れて行きましょう～。」
「それお前が入りたいんだろ？まぁ戻ったらのんびり温泉もいいな。Ｆ．Ｄのとこ行こうぜ。」
「いいですね～。」
「よし出来た。」
「二人とも頼んじゃって悪いが気を付けて行ってきてくれな。」
「大丈夫ですよ親父さん～。」
「旅慣れてますから。」
「では行ってきます。」
「行ってきます～。」

真横にいた太陽がすぐに私達を見降ろす位置になった。雲もなくて

日差しがちょっとチリチリする。
きちゅねさんは普段より速度を落として、揺れないようにと意識してくれているみたい。
「いい天気でよかったですね。」
「そうだな。雨だと視界も悪くなるし、きちゅねもこんなに速く走れないだろう。」
「湿気で髪の毛や尻尾がはねるのも嫌ですよね～。」
「爆発すると直らないんだよなー。」
そんな事を話してる私達を乗せながらきちゅねさんは軽やかに駆けていく。

ちょこちょこ休憩挟みつつ、夕方になるかならないか位で水晶の谷へ到着した。景色が森の緑から岩の灰色に変わり、切り立った崖に挟まれた谷底は涼しそう。崖の途中途中にキラッと反射するものがある。あれが水晶かな。
「よし、まず野宿出来る場所を探そう。」
「はい～。どういう所がいいんですかね？」
「んー。出来れば木の根元とか。洞窟なんかがあると楽かな。テントが風に飛ばされたりもしないし。」
「あそこの洞窟なんてどうですか？」
「お！いい感じ。ちょっと見てみよう。」
谷に入ってすぐの所に、おあつらえ向きの洞窟があった。奥行きもそんなに広過ぎるわけでなく、程良い感じ。
「獣の気配もなし。寝ぐらにされてもないみたいだし…良さそうだな。ここにしようか。」
きちゅねさんから下ろしたテントを洞窟の中に二人で広げてユウスケさんがテキパキとテントを設営する。
「この中で空気も流れてるし、火も炊けそうだからご飯にするか。

腹は？」
「途中で軽くパンをつまんだりしただけだから結構空いてます～。」
「ん、キャンプ定番のカレーでも作るよ。テントの中に荷物運んじゃっといてー。」
「はーい。」
その間に辺りから集めていた小枝でたき火の用意をし、食事の用意を始めるユウスケさん。
「ユウスケさんも疲れてるだろうし、なんか何も出来なくてごめんなさい…。」
「どうした急に？」
「いえ…なんかいつもやってもらっちゃってるし、私何にも出来なくて…。」
「野宿なんてやったことないんだから、いきなり出来る訳ないだろ。出来ない事は悪い事じゃないよ。少しずつ覚えようとしてくれればいいんだし。お店の仕事だってすぐに覚えたんだろ？俺も少し教えたの見た感じコンスケは覚えがいいから大丈夫だよ。」
そういいながら優しく頭を撫でてくれた。ちょっと涙出そう…。
「はい…。」
「ん…今日は朝も早かったし、さっさと食べて寝てしまおう。食器の用意お願いな。」

ご飯を食べて後始末している間に一気に暗くなった。私はテントの中、ユウスケさんは火の番をしながら寝袋にくるまった。みの虫状態だ。きちゅねさんは流石に疲れたのね、もうぐっすり寝てる。静かなんだけど、虫の声や鳥の羽音が聞こえる度にちょっとビクッとしてしまう…。ごそごそと寝がえりうってるとユウスケさんが声をかけてきた。
「ん…コンスケ…眠れないのか？」
「はい…何だか寝付けなくて…。」
「お泊りは初めてだもんな。しかも野外だし。眠くなるまで少し話

すか？」
「いいですよ。ユウスケさんの昔の事とか聞いてみたいです。」
「昔ねー。さっき食事の前に話した事だけどさ、俺、昔は何にも出来なかったんだよ。」
「そうなんですか？完全無欠みたいに見えますけど。」
「そんなに何でも出来るわけじゃないよ。前にも話したけど、姉ちゃんと家に二人の事が多くてさ。色んな事を失敗しながらちょっとずつ慣れていったんだよ。」
「そうだったんですか…。ちょっと意外です。」
「武術と一緒でさ、まずは基礎をずっとやるんだよ。で、身体が覚えて来たら少しずつ他の事もやっていって。まぁずっと勉強だけどな。そうやって積み重ねたものが自信になるんだよ。怖がらずにやったらいい。俺もフォローするからさ。」
「…はい…。」
何でこの人はこんなに優しくて強いんだろう。私はまだまだだなぁ…。ちょっとずつやれたらいいな。
話してて落ち着いたのか眠くなってきた。その後は物音も気にならず、すぐに睡魔がやってきた…。

翌朝明るくなってすぐに支度して谷底を進んでいく。
きちゅねさんは荷物番＆ａｍｐ；休憩。今日もまた走ってもらうしね。
まだ太陽が高くないから薄暗い。一人だったら絶対行きたくないな。なんか怖いし。

ちっちゃいリュックを背負ったユウスケさんが目を閉じて深呼吸する。
「こっちかな…。」
「匂いでわかるんですか？」

「かなり独特だからね。」
「へぇ〜。」
「あれだ。」
ユウスケさんが指さした先に、木の根元に茸が固まって生えていた。
「なんか…随分存在感ありますね。」
「ＴＨＥキノコって感じの形だよな。実際に生えてるのは俺も初めて見たわ…。」
親父さんが描いてくれた絵と比べても間違いなさそうだ。
「ここにある分で足りますかね。」
「いいんじゃないかな。かなり量あるし。お客さんに出す分と俺達も食べられる分だけ採ったら残しておこう。あんまり荷物になってもきちゅねにも負担だしな。あ、あんまり穴が開いてるのがあったら採らない様に。」
「はーい。」
二人してもぎゅもぎゅと茸を収穫する。持ってきた籠が一杯だ。
「この中で虫食いがあったら捨てなきゃだな…。切ってみるか…。」
ユウスケさんがまな板と包丁をリュックから出してきた。用意がいいな。
「私が切りますよ。虫の確認とかよく分からないですし。」
「あいあい。二つに分ける位でいいからね。まかせた。」
スパッ！と半分に切って渡すを繰り返す。いつも仕込みでやる要領だね。虫出てきませんように…。
「う〜〜ん。」
「え！虫いました！？」
「いや、逆…。全くいない。普通ウニョロウニョロしたあれがいるんだけど、すごい綺麗。持った感触もスカスカじゃないしね。すごいなーここの茸。」
「よかったです…。」
切っててそんなものが出て来たら悲鳴上げちゃう…。

結局採った分を全て切っても虫は出て来なかった。よかったー。
籠にまた詰めて、落ちない様に布でくるんで口をしっかりと結ぶ。
「よし、まだ昼にもなってないし帰りは楽勝かな。」
「ささっと帰りましょう～。」
来た道を辿って谷の出口へ向かって歩き始めると、洞窟があった。
「昨日泊ったのはこれでしたっけ？」
「いや違うよ。もっと谷の入口の辺りだったはず。そもそも朝通った時他に洞窟なんてあったかな…。」
「中で何か光ってますよ。水晶かな？近くでまだ見てないから行ってきていいですか？」
「俺も行くよ。結構光ってるけどでかい塊なのかな？」

少し入ると結構中が広い洞窟だ。光ってるのは平らな面が大きく綺麗に磨かれた様な塊だ。
「鏡…ですかね？」
「鏡みたいだよな…。水晶で出来てるのかな？随分透明度高いなぁ。」
二人で鏡に身体を映しても充分余裕がある。高さも横幅も私達の二倍位だ。
「えへへ。こうして見ると本当に双子ですね。」
「そうだな。」
並んで鏡に映るなんてないからなんか新鮮。金の尻尾でちょっと吊り目のきりっとしたユウスケさん。銀の尻尾で垂れ目でほわーんとしてる私。あぁ妹って言われて納得するなぁ。

フィィィィン

突然響き渡る音に耳が痛くなる。
「ユウスケさんこの音って一体…。」

「鐘の音…？頭に響く…。」
私の横でドサッとユウスケさんが倒れる。私も意識が…飛ぶ。茸を入れた包みが落ちる。
意識が飛ぶ前に誰かの声が聞こえた気がした…。

キノコをもとめて（後書き）

実際の生のポルチーニは結構虫がいるようです。描写すると気持ち悪くなりそうです…。
以前、乾燥や缶詰めのを使った事がありましたが独特の歯ごたえと香りは結構いいものです。気になった方がいたらお店で食べるのをおススメします。
一応日本でも採取は可能らしいですが、ほとんど輸入物ですね。お値段は高めです。

われをくぐりて汝らは入る（前書き）

少し特殊な書き方をしてあります。
読みづらかったら申し訳ないです。

われをくぐりて汝らは入る

気が付くと辺り一面真っ暗闇だ…。目を閉じているよりは少しだけ明るいけど、自分の手もほとんど見えない。

少し離れた所に誰かがいた。
小さな男の子だ。膝小僧を抱いてうつむいて、なんだか辛そうだ。

どうしたの？どこか痛いの？

ううん…痛いんじゃなくて…辛いんだ…
間違ったことをするな、完璧でなきゃ駄目、いつもしっかりとしてないといけない
そうじゃないと父さんは僕を見てくれないんだ　姉さんも男なんだからしっかりしなきゃいけないってそう言うんだ　でも、ずっとそういうのでいようとしてると疲れちゃうんだ。でも疲れたらそんなの本当は出来ないから無理しちゃうんだ　ずっとそんな繰り返しで僕、辛いんだ…

私も男の子の隣に体育座りをして、また声をかける。

別に見てもらえなくてもいいんじゃない？そんなに無理しなくても、他の事できっと見てくれる人がいると思うよ？私だったらそんなの疲れてヤダよ

でも、今までずっとそうやってきたから、無理しない事がどういう

事か分からないよ

じゃあ何もしなくていいと思うよ

何もしないの？

うん、何もしないで寝転んでね、何かしたくなったらやればいいと思うよ　私はお休みの時に草原とか森でそうやって転がったりしてるよ　それで雲が流れたりしてるのを見てると気持ちいいの　それからやりたくなった事をやるの　誰かに言われたからやるとかじゃなくてね

でも、そうしたら父さんも姉さんも見てくれなくなるよ…

そこまでしないと見てくれないなら一度こっちも頑張るのをやめちゃってさ、違う自分を見せたら変わるかもしれないよ　それでも見てくれなかったら…

見てくれなかったら…？

私が見てるよ　私がいなくなっても見てる人がいたって思えたら少し楽にならない？

…うん…きっと今までよりは楽になれると思う　でもいなくなるのはヤダな　一緒にいてよ

じゃあ、いれる間は一緒にいるね

…うん…それでいい　ありがとう…

そこで男の子は初めて顔を上げた。
暗いからはっきりとは見えないけど、見た事のない顔のはずなのに私はこの子を知ってると思った。
もしくはとてもよく似た誰かを私は知ってるはずだ。何故か思いだせないけど。

どこで見たのかな～と腕組みしたら、胸ポケットに入ってた何か固いものが手に当たった。
マスターにもらったお守りだ。出してみると黒いはずなのに何故かこれ自体が光ってる。

まぶしいね　ここは暗いんだって初めてわかったよ

そうだね　すごく暗いし、あんまり長く居たい所じゃないね　明かりも出来たし、行こうか

うん

私は男の子に手を差し出す。掴まって立ち上がったその子の顔は…

お姉ちゃんどうしたの？

ふふ、私もね　とある人に励ましてもらったんだよ

そうなんだ　そんな人に僕もなれるのかな

絶対なれるよ　そこに向かって行けばね　ホラ行こう　あっちにも光が見えてきたからきっと出口だよ

うん

私はその子の手を引いてお守りを前にかざしながら光る方に向かって歩いて行った…。

われをくぐりて汝らは入る（後書き）

ここだけだと意味が分からないと思うのでなるたけ早く続きを書きます。

C．D（前書き）

なんだかんだと遅くなりました。続きです。

C・D

目を覚ました私はユウスケさんの手を握って地面に転がっていた。
あの鐘の様な澄んだ音を聞いて、そのまま倒れて…寝ていた…のかな？
どの位時間が経ってるか分からないけど、今日中に帰りたいし早く出発しないと。

「ユウスケさん起きて下さい。帰りますよ。」

返事がない。なんかぐったりしてる。息はしてるけどまだ意識が戻って来てないみたい。
こういう時は無理に起こさない方がいい気がする。仕方ないから背負ってきちゅねさんの所まで戻ろうかな。そんなに距離はなかったはず…。

荷物も持って頑張ってユウスケさんを背負った。重いとは言わない。だって私と同じ体重のはずだし。…うん…軽い…軽いはず…だよ？
ちょっとよろよろしながら歩きだした時に後ろから声がした。

「……逃がさない……。」
「え？」

振り返ると、水晶の鏡の陰から白い服を着た女の人が出てきた。前にF・Dさんの所で着てたユカタとかいうのに形が似てる服だ。
腰まである長い髪が俯いているせいで顔を完全に隠してる。え…なんか怖いんですけど…。

「……。」

「……へ？」
「……よ……。」
「……え！…何ですか？？」
「……で……なの……。」
「……えっと…もう帰っていいですか？」

ごめんなさい、何言ってるか全然分かんない。というよりも聞こえないんですけど…。もういいや、ほっといて帰ろう。
無視して入口に向かおうとしたら

「待ちなさい！！！！」
「ひゃい！」

いきなり叫んだよー。思わず変な声出たよ。
そしてす～～っと音も無く近づいてくる…。いやぁぁ…。
肩をガシッと掴まれる。顔近いんですけど…。目だけ赤いし…うわぁ夢に出そう…。

「…キノコの代金…貴方達払ってないでしょ…！」
「へっ？」

無言で外に連れて行かれ、崖の中ほどを指差される。キノコの事考えて下ばかり見てて気付かなかったけど、目線よりだいぶ高い所に何か書いてある。
えーっと【キノコのふるさと　水晶の谷へようこそ☆】ようこその隣にはザルに山盛りのキノコのイラストが書いてある。

「え…っと…。」
「…ここ…有料になったのよ…。地元の受けもよくって…。…これ、ここの案内ね…。」

パンフレットを渡された。へえ～色んなキノコがあるんだ。松茸・トリュフ・舞茸・しめじ・サルノコシカケ？そんなキノコもあるんだ…。あ…本当だ有料だ。料金表によるとポルチーニさんは…あ～結構高い。そんなにお金持ってきてないよ～。

「なんか…すいません…知らなくて。あのですね…今日は…その、持ちあわせがそんなにないのですが…。」

「…ツケでもいいわよ…。」

「あ、じゃあそれでお願いします…。」

「…この紙に住所と名前書いてね…。」

宿屋の住所でいいかな、リーフタウン大熊亭方コンスケ＆ユウスケと。

「…あら…あなた達…リーフタウンの人だったのね…。…じゃあ今度お店に食べに行く時にお代を頂くわ…。」

「あ、はい。お待ちしております。お休みでなければ私達で給仕してますので。」

「…じゃあこれ証文代わりね…。…返さなくていいから…。」

透明な板みたいなのをもらった。なんかマスターにもらった黒いお守りと形が一緒だ。これは光を反射してるけど。

「…お店に行ったら声かけるわね…。…私、C・Dというの…。」

「わかりました。失礼します。」

あれ？どっかで名前聞いた気がするけど…どこだっけ？まぁいいや早くしないと今日中に帰れなくなるし。

まだぐっすりと寝ていたきちゅねさんの所に着いたら、ようやくユウスケさんが目を覚ました。

「おはようユウスケさん。体調大丈夫ですか？」
「うぅん…なんか長い夢を見ていた気がする…。あれ？ここ、きちゅねの所？運んでもらっちゃったのか…悪いなコンスケ。」
「大丈夫ですよ。色々ありましたけど…。」
「色々？」
「長くなるのできちゅねさんの上で話しますよ。とりあえず早く出発しましょうよ。」
「あいあい…。あ～頭痛いわ…。」

二人して荷物を急いでまとめ、きちゅねさんに括りつけながらユウスケさんに聞いてみる。

「どんな夢でした？」
「なんか暗い所から誰かが出してくれる夢かな？詳しくは覚えてないや。」
「奇遇ですね。私も誰かを連れ出す夢は見た気がしますよ。」
「二人して同じ夢見てたりしてな。」
「ですね～。」
「よし用意完了！食料はほとんどなくしたし、帰りは速度出していいぞ、きちゅね～。」
「コ～ン！」

しっかり眠って元気一杯みたい。これは早く帰れるかな～。

その後はどうにか真夜中になる前には帰れて、親父さんにキノコを渡しそのまま二人してすぐさまベッドにダイブしたのでした。

疲れた～～～～。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

フィィィィン

水晶で出来た鐘が鳴る。

「…浄玻璃の鏡からあっさり抜け出すなんて、あの方の言う通り面白い二人だわ…。…王にも報告しないと…。…とりあえず…ポルチーニ茸はクリームソースパスタで出してもらおうかしら…。」

音が鳴った後で水晶の鏡が、ゆっくりと門の形に変わっていった。

C．D（後書き）

ちょっとホラーを書こうと思ったのに、登場人物がみんなしてギャグに走りたがるのは私の頭がお気楽なのでしょうか…。

ちなみに「キノコのふるさと」でトリュフを採る場合は豚も貸してくれます。料金は保険金込みです。採り放題ツアーは残念ながら実施されておりません。

寝ぼけ眼の狐です

翌日、頑張って朝いつもの時間に起きた俺達だったが、今日は仕込みをするからお店はお休みというありがたい言葉を聞いてそのまま夢の世界に帰って行った。改めて起きたら昼を過ぎていた。

「…腹減った…。」

これ以上は空腹で眠れない。下りる前にコンスケの部屋も覗いてみたが、きちゅねをハグしながらまだしっかりと寝ていたのでそのままにしておいた。俺と同じ様に腹減ったら起きて来るだろう。

「おはようございます…。」

「おはよう、良く寝てたね。随分疲れさせちゃったみたいですまないな。」

「大丈夫です。ふぁ～あ…あ！すいません。」

「はっはっは、良いってことよ。今夜は二人に給仕だけお願いしたいんだが頼めるかな？」

「勿論ですよ。コンスケ起こしてきますか？」

「起きるまで寝かしておいていいよ。腹減ったろ？パンとスープでいいかな？」

「ありがとうございます、頂きます。」

親父さんが出してくれたスープにパンをちぎって浸してもきゅもきゅと食べてると、きちゅねを羽交い絞めにしたままコンスケが下りてきた。

「おはようコンスケ。」

「……。」

「コンスケ…？」
「……。」

よく見たら目を閉じたままだ。こいつ…寝てるのにパンの匂いに釣られてやって来たのか？
コンスケは無言で俺の座ってるテーブルまで来ると断りもなくパンを奪い、立ったままもしゃもしゃ食べ始めた。

「あの～？コンスケさん起きてますか～？」
「……もしゃり…。」

駄目だ…。完全に意識ないみたいだ。
コップの水も飲んでるし器用過ぎるぞコイツ。

「……コンスケさんそれ俺のご飯なんですが…。」
「……ぐぅ……。」

そのまま立ったまま固まって眠りだしたし…。駄目だこりゃ。
羽交い絞めにされても寝てるきちゅねも凄いけど、可哀想だから外しておこう。

「ハッ！私は何を！？」
「起きたかコンスケよ…。」
「ユウスケさん何で私の目の前にいるんですか？」
「周りをよく見てみろ…。」
「あれここ1階？なんで私ここに？」
「寝惚けて下りてきたみたいだよ…。俺のご飯奪いやがって…。」

「そんな夢は見ていませんよ？」
「現実で発生した事でございます、お嬢様。」
「記憶にございません。」
「ネタは上がってるんだ！覚えていなくても貸し一つな！」
「ひどい！」
「どっちが…！」
「だって…私、今お腹空いてるし！」
「知るか！」

そんな俺達に救いの神が…。

「ほら…パスタ作ったから『二人』で仲良く分けなさい」

アスパラとナスとベーコンが入ったペペロンチーノが舞い降りた。

「おぉ～ありがとうございます。」
「コンスケ、きちんと半分ずつだからな！」
「分かってますよ！」
「ベーコン多めな！」
「はいはーい。」

取り皿に分けてもしゃもしゃり。

「ふー。」
「ふ～。」
満足なり。

「なんか最近前にも増して二人が似て来てる気がするね。」
「そうですか？」
「私こんな食い意地張ってないですよ。」

「失敬な！よく食べ、よく動いて、よく寝て、よく育つ！いい事じゃないか！」
「私と同じサイズじゃないですか！」
「それはどうかな…ふふふ。」
「まさか…。」

また止まらない俺達を止めて親父さんは服を渡してきた。

「もう漫才はそこらでいいから、そろそろ着替えてきてくれお二人さん。」
「はーい。」
「ほーい。コンスケ行くぞ～。」

寝ぼけ眼の狐です（後書き）

もう…漫才がヒートアップしていく…。

胃袋に愛情つめて（前書き）

深夜に読むと、お腹に優しくない描写がありますので（食欲的な意味で）ご注意ください。

胃袋に愛情つめて

「これは！？」
「あら可愛いじゃないですか。」

親父さんから渡されたのは二人分のメイド服だ。ヘッドドレスまで付いている。今日は親父さん気合い入ってるなぁ。というか、こんなのこの宿屋に置いてあったのか…？

「コンスケ着方分かるか？」
「えっと…そのまま着ればいいんじゃないですか？」
「パニエ…えーと、この骨組みたいなのを下着の上に装着してから、スカート履けばいいよ。上着の方は上から着て背中側を閉める。ボタンタイプだから留めるの難しかったら言ってくれればボタン留めてやるから。」
「は～い。詳しいですね。これもお姉ちゃんの影響ですか？」
「え？自分で着てたから。」
「え！気持ち悪い…。」
「いやいやいや待て待て！！舞台の仕事で着た事あるだけだよ！普段は着てないよ。」
「…へぇ…そぅ…そうなんだ…。」
「お前俺の事なんだと思ってんだよ…。」
「ステキナオネエチャンデスヨ。」
「お前なぁ…。いいからさっさと着替えてこい。」
「はーい。」

着替えた後も、こんな調子でなんやかんやと、きゃいきゃい言い合いしながら用意を進め、あっという間に時間が過ぎ、ランプに火を入れた頃にお客さんが到着した。

「いらっしゃいませ～！」
「いらっしゃいませ。」
「これはこれは…こんな可愛いメイドに案内されるとはな…。」
「ありがとうございます。」
「あぁ、案内してくれや嬢ちゃん達。」
「はーい。こちらへどうぞ～。」

コンスケが先導し、俺が男の人の後ろからついて行く。俺の目線よりも少し上位の身長だから…あっちの俺と同じ位か。いい筋肉してるわ。それに軽装ながらも、きちんと鎖帷子を身に付け、手に持った剣も重そうなバスタードソードなのに歩き方にブレも隙もない。かなり出来るなこの人。西洋剣術も知り合いがモーションでやってたけど、ガチで着こむと半端ないからな。
鎖帷子から音がしないから銀とか使ってるのかな。擦れると痛いらしいけど…。

「おいおいそんなに背中に熱い視線送らないでくれよ。火傷しちまらぁ。」
「っ！失礼しました。この辺りでは中々見ないもので。」
「これだって使う機会は大してないけど一応形だよお嬢ちゃん。尻尾そんなに逆立てなくていいぜ。別に取って食いやしねぇよ。」

いつの間にか身体が緊張してたのか…。やはり侮れないな。敵に回したくはないわ。手合わせはしてみたいけど。
しかし緊張なのか、本能的な（女の子の）身の危険の緊張なのか判断に困る…。

「こちらです～。」
「ありがとう。」
「はい～。」

コンスケは何も変わらずいつも通りだ。

「親父さん案内しましたよー。」
「あいよ。料理全部出したら俺も行くから、どしどし出してくれ。」
「はーい。」

前菜の各種ハーブのサラダとジャガ芋のポタージュから始まり、ポルチーニのクリームパスタ、地鶏のハーブ包み、アクアパッツァ（魚のワイン煮込み料理）、ミートパイ、これらを出し続けている間にも消費されまくっているパンとワインの補充。皿もどんどこ空いて行く。この人…一人で団体の宴会並みに食ってるぞ…！

そして二週目…！？
今度は南瓜のポタージュに、ラム肉のトマトソースペンネ（普通のパスタよりもマカロニ風なパスタ）、豪快なリブステーキ、白身魚のムニエル、ポルチーニをふんだんに使ったリゾット、ティラミスで休憩。

そして三週目！？！？！？！？！いやいやいやいや！おかしいだろ！人間じゃねぇ！
と思ったら流石に打ち止めらしく、出しきる前に親父さんがやってきた。

「相変わらず凄まじい量食うなジーク。」

「お前も相変わらずの腕だなフェリング。」
「お互い変わらんな。」
「の様だな。」

二人はニヤリと笑って乾杯した。
これが通常の量ですか…。あり得ん。ランチの三日分位の量のパン焼いた気がするぞ…。
コンスケも途中から顔が笑顔から真顔になってたし。いや…コンスケさんそんな俺を同類みたいな目で見てもこんなに食えませんよ…？

「二人とも後は片付けだけだからもう大丈夫だよ。ありがとう。」
「洗い物やっときますよ。凄い量だし。」
「そうかい？悪いね。」
「気が効くなぁ嬢ちゃん。どっちか一人残ってお酌してくれてもいいんだぜ。」
「おいおい、うちの看板娘に手出すんじゃねぇぞ。」
「わ～ってるって。そんなに軽い男に見えるかってんだ。」
「おぉ、未だに見えるぜ。」
「酔ってんじゃねぇのか？」
「それはお前だ。」
「ちげぇねぇ。」

二人してガハガハと豪快に笑う。仲いいなぁ。そしてジークさんノリ軽いなぁ。

結局コンスケと二人して洗い物を終わらせる事にした。しかし山の様だ…。

「あんなに食べられる人がいるもんなんですね。」
「全くだよ。有り得ない量だぞ…。確かにしっかりと給仕してないと追い付かないわな…。」
「普段どうしてるんでしょうねー。」
「考えたくもないな…。」

簡単な汚れは落としてから、石鹸を泡立てて洗っていく。洗ったものは水を切ってからコンスケが布巾で拭いていく。

「キノコ美味しそうだったな。」
「うん、よかったです。」
「苦労した甲斐があったよ。あれ俺らの分ってあるのかな…。」
「さっきキッチンの端のざるに入れて置いてありましたよ。」
「おぉ楽しみだ〜。」

汚れがひどいのは漬け置きして明日洗うか。

「コンスケそっちは終わった？」
「これで…よいしょっと。終わりですよー。」
「よし上がるか。」
「はーい。」

さっと火の周りを確認し、キッチンから出る。

「じゃあ親父さん俺ら上がりますね〜って寝てるし…。」
「だいぶ飲んだからな。まぁ俺程じゃねぇが。」
「普段飲んでる姿見ないですからね。」
「流石に一人じゃつまらんから、少し酒付き合ってくれや。」

「少し位ならいいですよ。」
「お酒～♪」
あ…コンスケ酒大丈夫かな。まぁここでなら潰れてもすぐ連れてけるか。

新しくグラスを持ってきて三人分注ぐ。コンスケのは少なめにしておこう。

「それ少なめのはユウスケさんのですよね。私これもーらい。」
「あ…馬鹿。お前飲み慣れてないだろ？」
「大丈夫ですよ、ジュースジュース♪」
「おぅ垂れ目の嬢ちゃんもいける口かい？五月蝿いのはほっといて乾杯だ。」
「わ～い乾杯～♪」
「ちょっとちょっと…乾杯ー。」

あれだけ飲み食いしたのに、来た時とあまり変わらないジークさん。にへらにへらしながら飲んでるコンスケ。もう突っ込まないし、しらんぞ。

親父さんが突っ伏していびきかいてる横で何故か盛り上がるコンスケとジークさん。

「ぷはぁ～。」
「おぉイケるねぇ嬢ちゃん。ほら注いでやるよ。」
「ありがとうございます。次は赤いのがいいです。」
「おぅよ。やっぱ肉には赤だよな。」
「いや…色が綺麗だからー。」

「ハッハッハッ！面白い娘だな。気に入ったぜ。食いねぇ飲みねぇ。」
「はーい。」
あ…なんか俺だけ置いてかれた…。仕方ない…黙って食うか…。
もうテーブルの上には三週目に出した料理が半分位しか残ってない。
おかしい…。
お！チキンのパイ包み焼きが残ってる。おかみさんお手製のパンがあれだけ美味いんだから、パイも推して知るべしってやつだね。
ナイフを入れるとサクッ！といい音がする。
外はサクサク。中は肉汁たっぷり。お肉がスパイスに漬け込んであるのか…。これはお酒進むだろうなぁ。
おぉーこっちは川魚のフライ。カリッと揚がってて、冷めても美味しいな。レモングラスで風味もいい。
親父さん相変わらずいい腕してるよなぁ。そりゃこうやって古馴染もわざわざ食べに来るよ。
自家製のマヨネーズで食べるサラダもいいなぁ。マヨネーズって自分で作ると混ぜるの結構大変なんだよな。
俺が黙々と味わいながら食べている内に、気付けばなんか口調が怪しくなってきている人が一名。

「ジークさん王宮務めなんですかぁー。凄いですね！」
「おぅよぅ～。これでも傭兵隊の隊長なんだぜぇ～。モテるんだぜぇ～。」
「へー。傭兵隊って何やるんですか？」
「訓練ばっかだなぁ…。冒険者時代にフェリングと一緒に色々旅してた方が気楽だったよ。最近は付近住民を脅かす魔物と化したデカイ動物～なんかもいなくてなぁ、張り合いねぇんだよ。」
「そんなのいるんですね～。」
「おぅ。巨大熊と戦った時も凄かったぜ。フェリングのやつ素手で

熊のヤツと掴みあってよぉ。どっちが熊がわかんねぇでやんの。」
「あぁ確かに～。」
「結局そのまま熊を放り投げて気絶させて終わりよ。あり得ない強さだよな～。」

あり得ないのはあんたの胃袋だ…。という突っ込みは心の中にしまいながら耳を傾ける。
親父さん最強過ぎるなぁ。

「そういやフェリングに聞いたが嬢ちゃん達探し物してんだって？」
「え？あぁはい。巨大な門を探してるんですが…。」

急に話を振られて驚きながらも言葉を返す。王宮務めならそういう情報も入ってくるのかな？

「門なぁ…。聞いた事はないが、探し物なら王宮に丁度いいのがいるぜ。S・Dっていう占星術師なんだが。」
「S・D…。まさか。」
「お！聞いた事あるか？都じゃ結構有名なんだぜ。やれ失せモノが見つかっただの、やれ恋の鞘当てが上手くいっただの。」

言い回しが古いなぁ。けどこれはヒントになるかもな。行ってみるか王宮へ。

胃袋に愛情つめて（後書き）

なんで夜中にお腹の空く話しを書いてるんだろう…（；一＿一）

手作りマヨネーズは空気とふんわり混ぜると美味です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0762w/

ふぉっくすている

2011年10月13日03時52分発行